382.197
Si294a2

0053666000

0053666-000

382. 197-Si294a2

奄美大島民族誌

茂野幽考・著

岡書院

1927

AIA

382.197
S; 294a2

昇曙夢序
伊波普猷跋

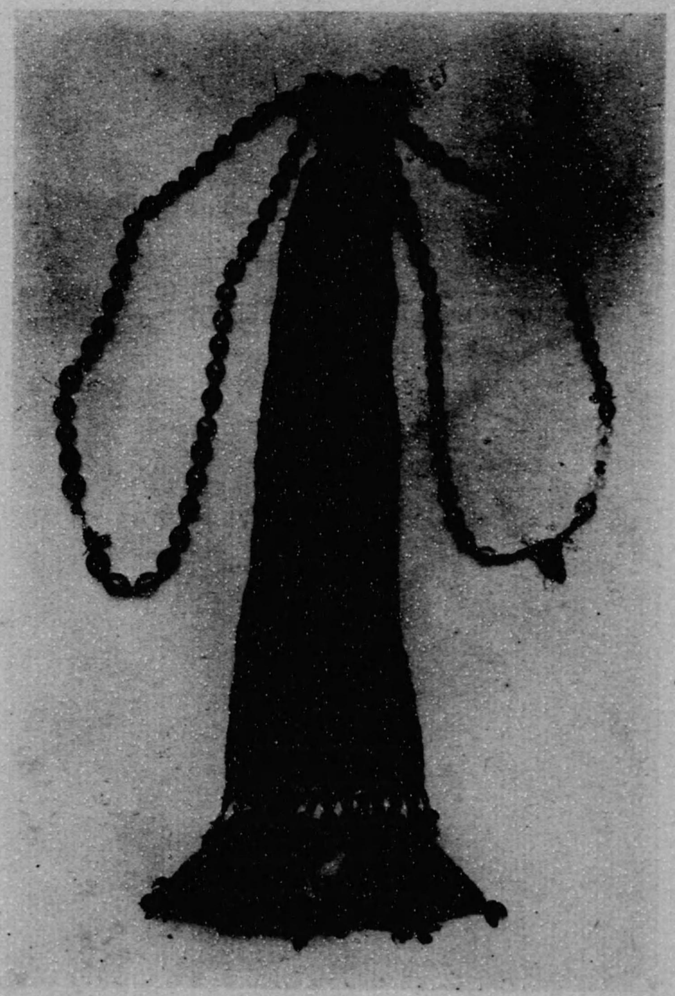
茂野幽考著

奄美大島民族誌

東京　岡書院版

382.197
Si294a2

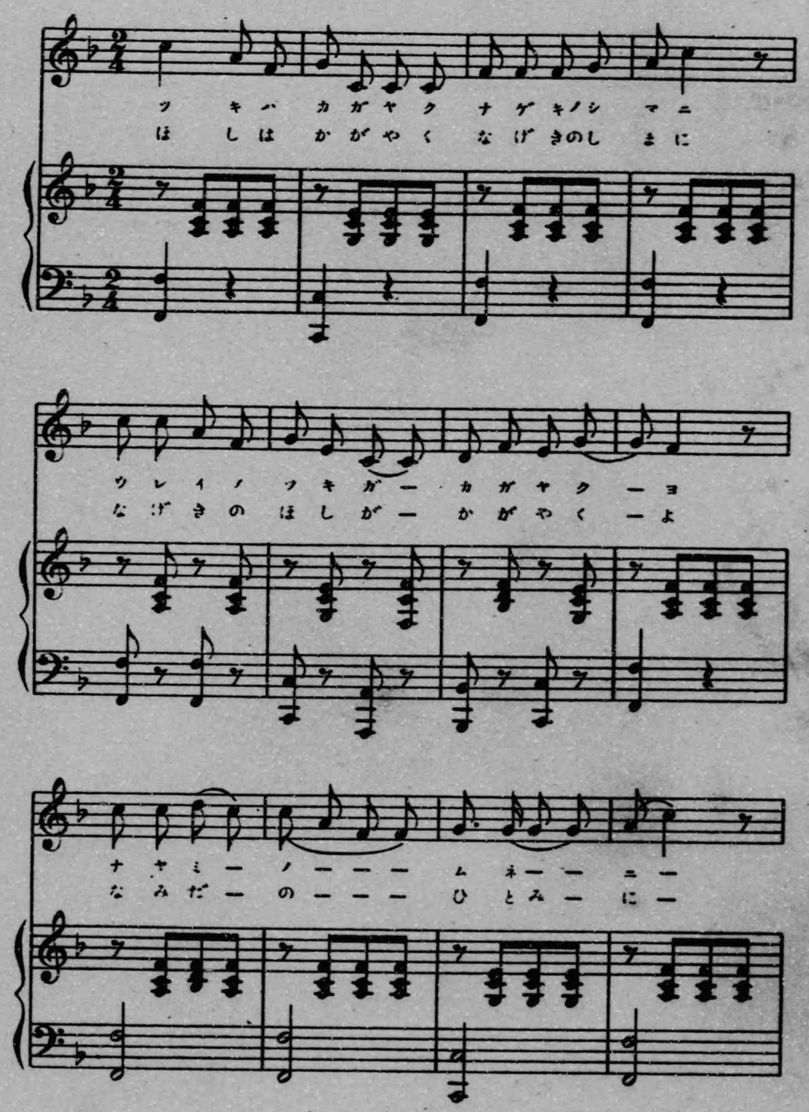
237963

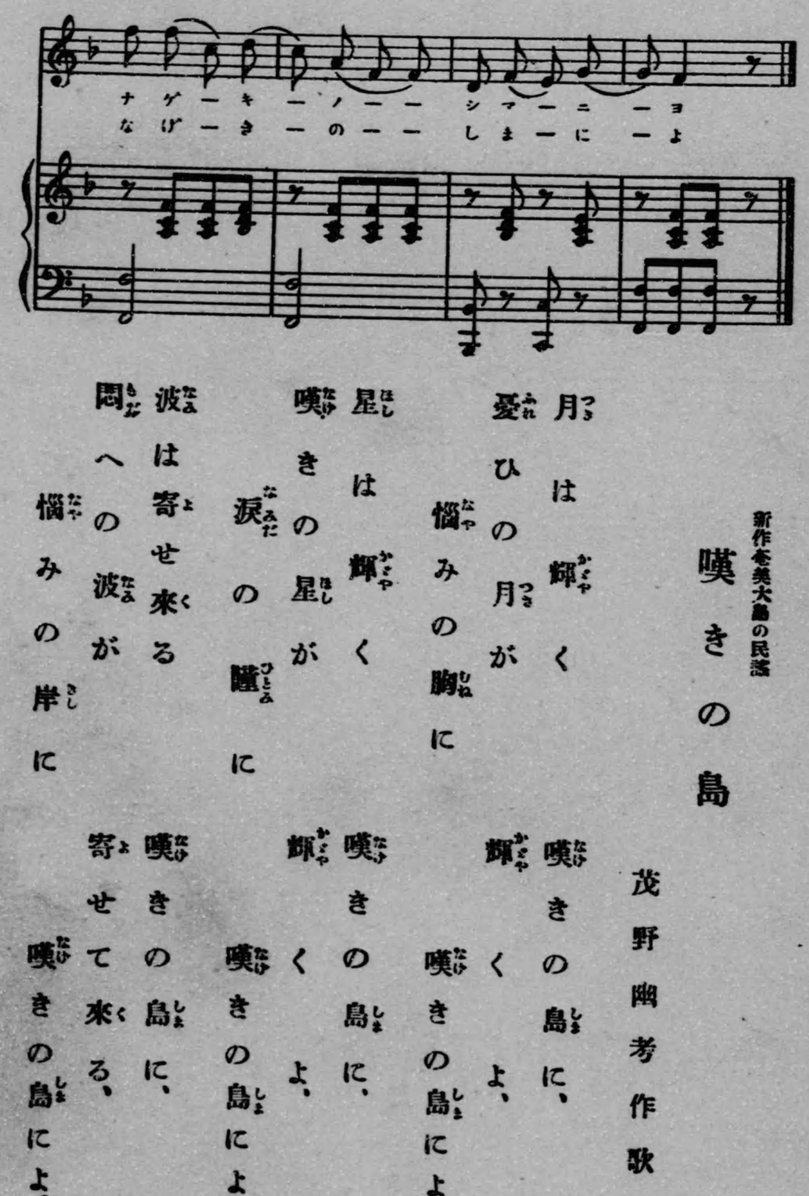


乃呂久目祭樂用玉ばべる

嘆きの島

新作奄美大島の民謡　YUKO MUSIC. No.30.
M. D. S.





新作奄美大島の民謡

嘆きの島

茂野幽考作歌

月は輝く　嘆きの島に、
憂ひの月が　輝くよ、
悩みの胸に　嘆きの島によ。

星は輝く　嘆きの島に、
嘆きの星が　輝くよ、
涙の瞳に　嘆きの島によ。

波は寄せ来る　嘆きの島に、
問への波が　寄せて来る、
悩みの岸に　嘆きの島によ。

序

奄美大島は地理的關係から言つて、鹿兒島と琉球との中間に位してゐるが、文化的關係から見ても、琉球文化と日本內地の文化との接觸點になつてゐる。そればかりでなく、古くは、先住民族アイヌの遺跡もあり、朝鮮、支那、南洋諸島と交通した形跡もある。

斯樣に諸種の文化要素がこの島で互に錯綜してゐるところから、自然、人類學上、土俗學上研究すべき資料が極めて豐富である。

それに島は他の陸地との交通が、比較的薄いから、周圍の影響を蒙

ることが少なく、隨つて古文化の保存所として知られてゐる。この點に於いて奄美大島は琉球と共に、文化史的に見て、極めて貴重な古文化の寶庫である。鎌倉時代以前の言語、風俗、習慣、儀禮が其儘に保存されて、今日日常生活の間に使用されてゐるのは一異觀である。殊に言語の如き日本內地では既に死語となつて、國學者の間にすら意義が全く解らなくなつてゐる古代和詞が、大島や琉球では現に生きて使はれてゐるので、時として我が學界に意外な發見を齎らすことがある。中には歌謠は紀記萬葉の古調を傳へて、更にそれよりも質朴高雅な氣韻に富んでゐるものが多い。それに大島は古くから、俊寬の流謫、爲朝の來島、平家殘黨の落入りを始め、琉球服屬時代の傳說、海洋島獨特の不思議な物語、例へば遠島人、漂流船、南蠻人、倭寇、海賊船、難破船等の樣々な物語、それと南國特有の情熱的なローマンスが絡み合つて、世界でも珍らしい詩と傳說の國を形造つてゐる。

斯かる豐富なる資料を藏してゐながら、今まで長い間閉された寶庫のまゝ空しく學界から閑却されてゐたといふことは、實に不思議なほどである。琉球には伊波普猷君、東恩納寬惇君、境名安興君の如き篤學の士があつて、著書に講演に新聞雜誌に、絕えず研究の結果を發表し、これに刺戟されて日本內地からも、學者文人が態々琉球に出かけて行つて研究する者が多い。我が大島は琉球と同じ文化系統に屬して、而も多くの異つた特色を有するに拘らず、未だ曾て其樣なことがない。それには勿論大島に適當な記錄の徵すべきものが無かつたといふ事情もあるが、それよりは鄕土研究熱の乏しかつたと

いふことが重なる原因である。大島に關する著書で學界に知られてゐるのは、僅かに坂口德太郎氏の『奄美大島』を數へるくらゐのもので、他に幾種かの史料があつても、それは或一地方の歷史に限られてゐるか、でなければ未發表のまゝの草稿に過ぎない。兎に角大島に斯種文獻の乏しいのは事實であつて、而もそれは主として適當な研究を得なかつたといふところから來てゐる。この時に當つて、茂野幽考君の如き熱心なる鄕土研究家を得たといふことは何より嬉しく思ふところである。君は大島に生れ、大島に育ち、米國にも遊學し、豫て民族藝術の專門家として知られた眞面目な青年學徒である。言ふまでもなく、本書は今まで何人も手を下さなかつた未知の世界に、初めて研究の手を延ばした大膽な試みではあるが、また一つの新らしい發見として、我が學界に貢獻するところが多いだらうと信ずる。少なくとも本書によつて南島の秘密の扉を開くべき鍵が與へられたのであるから、今後は我が南島にも多くの鄕土研究家が續々として輩出することであらう。

昭和二年八月

昇曙夢

自序

大正十二年九月一日、彼の關東大震災の翌朝、横濱市蓬萊町の河中數千の死體の内から奇蹟的に、生命を取り止めて、河岸に這ひ上つた青年、それは罹災當時の自分である。

河岸前の住家は燒失して、影も形もなく、未刊の稿本はじめ、世界各民族の民謠樂譜、樂器等一切の物を灰滅に歸し、民族藝術研究に捧げた數年の努力は、一夜のうちに煙に化してしまつたので、茫然と燒跡の灰を眺めてゐた時、ふと念頭に閃めいたのが、十年前に去つた自分

の郷里、奄美大島である。

島へ歸らう！　恁う思ふと、心は罹災中の苦難を忘れて、懷かしい島へ走つてゐた。

横濱は既に、生活の舞臺も背景も灰滅に歸し、殘るものは、哀れにも傷ましい思ひ出の影であつた。この傷ましい影を脊負うて、長崎丸の甲板に立つたとき、悲嘆絶望のかわりに、豫ての計劃であつた南島の民族藝術研究に心は燃え立つた。

譬へ五年でも、十年でも、其目的を果すまでは、島に閉ぢ籠る覺悟を決めて、住み慣れた京濱の山河に別れを惜しみ、九月九日の夕方横濱を去つたのである。

大島に閉ぢ籠つて四ヶ年の月日は、夢のやうに過ぎた。四ヶ年の間寂しい島で、隨分苦るしい努力を南島研究に捧げた。

其昔僧俊寛の流竄や、西郷南洲の謫居を思ひ渺々たる太平洋の水線に、ありし都の生活を偲びながら、島の秋を四度迎へて、愈〻南島民族藝術の内、奄美大島の部は一段落をつけ稿を編して、奄美大島民族誌と題し、柳田國男先生始め、伊波普猷先生昇曙夢先生等の御後援に依つて、今日出版の運びに至つたのである。

私は、大島本島竝びに、附近の島々隈なく踏破して、古記錄十數冊、アイヌ土器三點石斧一個、民謠歌曲百二十三、其歌詞三千餘首、外に土俗學上の貴重な資料を發見した。之等の研究に依つて、奄美大島の民族史を、ほゞ明瞭にした次第である。

記錄古文書の尠ない大島の民族史を研究するには、民謠に據らね

ばならぬ。大島の民謠は私が蒐集した分で三千餘首に及んでゐる。其の内には、琉下時代や薩藩時代の凡ゆる民族生活を謳つた歌が多い。

大島の民謠を、樂則と歌詞から、其原流を訊ねて行くと、古琉球の文學や民謠舞樂祭政等に踏み込んで行くので、大島の文化を知るには、大島の琉球服屬時代、卽ち文永三年から慶長十四年に至る凡そ三百四十年間の、琉球文學や、舞樂祭政等が、大島にどんな影響を與へたかを調べなければならぬ。故に、文化に限らず、大島の民族史を研究する者は、大島文化の母體たる、古琉球の文化をよく調べて置く必要がある。

古代琉球の思想や、宗教藝術等は、凡て琉球の萬葉とも云ふべき、おもろさうしに收められてゐる。

おもろさうしは、西暦十二世紀の中葉から、十七世紀の中葉に至る、四五百年間の神歌千五百五十一首を、收めたもので、既に南島史學の權威伊波文學士の研究に依つて、中央の學界に紹介されたので、南島を研究しなければ、日本の上古のことが解けないと云はれる程、學界から重要視されてゐる。

同氏は、おもろ研究に際し、古琉球の辭書混効驗集に依つて、多大な便宜を與へられたと云ふ。混効驗集とは、西暦千七百十一年に、舊琉球王國政府が、國王の命に依つて、編纂した、古代琉球語の辭書である。

私は、大島民謠研究に際し、混効驗集を繙いて、始めて現在の大島語の過半數が、古琉球語と同一同意語であることを識つた。そして古

事記、萬葉其他の國文學研究に依つて、古琉球語や、大島語の內には、鎌倉時代と其以前の國文學に現はれた和詞が、南島語の基本となつてゐることも解つた。

斯くの如く、大島と琉球とは、五世紀前に、政治的に、宗教的に、また民族藝術上同一譜系上にあつて、固く結ばれ今日に及んでゐるが、慶長十四年に、島津氏の橫槍が這入つて琉球と大島との政治的の交渉が絕たれ、大島々民には薩藩の糖業政策卽ち搾取政治が布かれて、民族的受難期が二世紀半もつゞいた。

其昔、琉球の敎化を受け、奬勵され組織された、純情的輕妙な大島の民謠は、この受難時代に詠嘆化してしまつた。

二世紀半に亙る薩藩の壓制は、明治四年の廢藩置縣と共に、旭日に照らされた朝露のやうに消へ失せた。更に大島は鹿兒島縣の管轄に移つて、琉球とは昔日のやうな政治的の連絡はないが、將來大島は琉球と接近し、提携しなければならぬ機運にあると思ふ。但それは、藝術的の接觸であり、融和である。

慶長十四年前に、琉球が大島に蒔いた民族藝術の種子が、今日に及んで實を結んだのである。そして、愈〻收穫の秋は來た。

凡て物の收穫は喜びであり、喜びは親和であり創造への第一階梯である。

民族の親和團結は、國家興隆の基である。

大島と琉球とは、歷史的に遡つて、其原流を訊ねて行くと、言語的に日本古代に歸結し神代に於て、大和民族との民族的血潮の歸結を發

見するであらう。

私達は、其處に、權威ある南方文化卽ち南島藝術の殿堂の礎を築かねばならぬ。

私は、南島研究に際し、柳田國男先生並びに伊波普猷先生坂口德太郎氏の著書、其他の文献を參考にして多大な便宜を與へられ、また教へられる點も多かつた。黯黮模糊たる南島の古代を明らかにして、後進の手引となつた先輩の努力に對し、私は感謝の念に堪へない。

尙本書出版に際し、昇曙夢先生を始め伊波普猷先生、特に柳田先生と出版社岡書院の御厚意を深く謝し、また大島滯在中、土俗調査に多大な贊助と便宜を與へて下さつた、郡視學鮫島信衞氏始め郡內各地村長小學校長、特に私の出生地東方村會の御後援を玆に謝して、本書の序文とする。

昭和二年夏　東京牛込の寓居にて

茂野幽考

目次

昇曙夢序
伊波普猷跋
自序
史實と文化
奄美大島の史實と文化……三
南島語と詩歌……三一
奄美大島の古歌
緣の歌……四九

思ひ文の歌……五四
花の歌……五七
思ひ出の歌……六一
掛け歌……六八
大島古語註釋……八四
大島人名と附加語……一三

葬制

奄美大島古代の葬制……一七七

乃呂久目

大島の乃呂久目……一七九
巫女妄信と其弊害……一八八

シャーマニズムから出た歌……一九四
巫女の呪術……一九七

舞踊

八月踊……二〇七
八月踊の舞樂系統……二一三
日西交通概要……二一六
スペイン商船の太平洋航路……二一九
スペイン商船と大島……二二二
八月踊のスペイン化……二二八
八月踊の詩……二三〇
餅貰ひ踊……二三六

唐手踊に就いて……二四〇
大島の三味線……二五一
大島の三味線の奏法……二五七
三味線の作法規定……二五九
三味線の調絃法……二六〇
民族生活と民謠……二六五
民謠詠嘆調の因……二六七
大島民謠の樂則……二七二
民謠の旋律解剖……二七七

器樂

民謠

大島民謠カンテメの死……二七八
大島民謠ムチヤ加那の死……二八八
古仁屋美人と琉球使者……二九六
大島の二歌人……三〇八
母性愛を歌つた鶉んめ……三一三
婚禮の歌……三一九
島の生活と舟……三三三
源爲朝と加計呂麻島……三三三
平資盛城址諸鈍の印象……三四〇
平行盛の最期と權太夫の戀……三五一

史話

行盛神社祭祀……三六〇
結論……三七五

樂譜

嘆きの島（茂野幽考編曲）……卷頭　二
琉球唐手踊の三味線譜（茂野幽考寫譜）……二四七
奄美大島民謠俊良節譜（茂野幽考編曲）……二七三

寫眞

乃呂久目祭樂用玉はべる……卷頭　一

目次終

史實と文化

奄美大島の史實と文化

薩南と沖繩との中間、鹿兒島から二百餘海里の洋上に、散在する大小二十餘の島を總稱して、奄美大島と云ふ。

奄美大島は、本島外附屬の島々、悉く山岳が海岸に迫つて、地理的に惠まれないのみならず、歴史的にも、常に隷屬者として、不遇なる時代を經て、明治維新に及んでゐる。即ち、文永三年(西暦一二六六)から、慶長十四年(西暦一六〇九)に至る凡そ三世紀半に亘る琉球服屬時代と、慶長十四年から明治四年の廢藩置縣に至る、凡そ二世紀半の島津氏の糖業政策

に因る民族的の受難期があつた。恁うした歴史を脊負うてゐるので、大島の郷土史は、他の郷土史とは、おのづから趣を異にしてゐるのである。

奄美大島には大島特有の文化がある。大島を知るには大島特有の文化、卽ち、生活樣式、土俗宗教、儀式祭典、船舶、言語、風俗習慣、神話傳說、器樂舞踊、民謠等の研究に據らねばならぬ。

大島は琉球に服屬する前に、大和朝廷と親交があつたことは、古事記や、日本書紀其他の古書に依つてわかる。日本書紀を繙いて見るに、推古帝廿四年(西暦六一六)から、大島と密接な交渉のあつたことが書かれてゐる。

推古帝廿四年、

掖玖人先後三十口歸化す。南島の大和朝廷に朝貢する蓋し此に始まる。南島を總稱して掖玖と云ふ。

同廿八年掖玖人漂着して伊豆の大島に至る。舒明天皇元年(西暦六二九)四月田部連等を掖玖に遣す。明年九月歸る。

白鳳元年(西暦六七三)二月多禰島人飛鳥寺の西槻の下に饗す。多禰も又南島を指す、同八年十一月倭馬飼部造連等を多禰に遣す南島人に祿を賜ふ。蓋し此の時代に始まる。

同十一年八月遣連等還る。多禰國の圖を奉る。

九月復多禰人を饗す。明年方物を貢す。持統天皇九年(西暦六九五)三月文忌博士等譯語諸田等を多禰に遣し蠻の居所を求めしむ。

文武天皇二年(西暦六九八)四月文忌博士等八人を南島に遣し圖を覓めしむ。

同年七月多禰掖玖奄美慶感等方物を貢す。

八月伊勢及び諸神宮に獻ず。

大寶二年(西暦七〇二)多襲命に逆ふ。兵を發し征討し遂に吏を置く。

慶雲四年(西暦七〇七)使を宰府に遣し南島人に位を賜ふ。

和銅七年(西暦七一四)十二月太の朝臣奄美信覺玖美等の島人を率ゐて還る。

雲龜元年(西暦七一五)南島人方物を貢す。

養老四年(西暦七二〇)十一月南島人二百三十二人に位を授くる事差あり。

天平七年(西暦七三五)太宰大貳小野朝臣老高稿連牛養を南島に遣し島毎に碑を建てしむ。

右の古記錄に依つて、大島は文永三年琉球服屬の前に、大和朝廷と如何に親交があつたかを知ることができる。

右は記錄に依つて見た大島の古代であるが、又言語學上から見ても、大島島民の祖先が大和民族の血潮と文化を受け繼いでゐることがわかる。大島の古歌に

今日のよかろ日に二女夫まぐあひて、
　鶴龜のごとくに榮えゆはを
今日のよかろ日に女夫まぐあひて
　巢ごもりの榮え鶴のごとくに、

と云ふのがある。古事記に

伊邪那岐命然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斥能、
　摩具波比爲せ云々

とある。大島古歌のまぐあひも、古事記の摩具波比も、同じく結婚と云ふ意味である。

此の外に、大島の民謠三千餘首の內には、神代語や、鎌倉時代と其以前の國文學に綴られた和詞が多く含まれてゐる。

琉球のおもろ(神歌)に、京鎌倉から、かはらを買つて來たと歌はれたのがある。また壽永四年壇之浦で敗滅したと傳へられてゐる。平家の殘黨、資盛、行盛、有盛等の一黨が、元曆元年に大島へ落ち延びて、加計呂麻島の諸鈍、大島本島の中央浦上、北部戸口等に城を築いたと口碑や記錄に殘つてゐる。其平家落人の城趾には、今日尙其時代の器物やかはらなどの破片が地中から現れて來る。之に依つて見るに、大島は古代に於て、內地と通交があつたと思はれる。

慶安三年、琉球の偉人向象賢に依つて書かれた琉球の正史中山世鑑に

志仁禮久、阿摩美姑

南島開闢の祖神なり。二神は初めて天より降り生活の道を開き陰陽妙合生むの道を始め給へり。二神に三男二女あり。長男をして國君の始めとなし、中は按司の始めとなり季は百姓の始めとなる。而して長女は、君(貴女の神職を司る者)の始めとなり。次女は祝(村邑の神事を司る者)の始めとなりて人倫の道此に定まる。

之は、南島に傳はる神話であるが、大島にも之と同型の神話がある。然して、大島の北部笠利村大字平の奄美岳と、南部の湯灣岳を兩神の降誕地として、參拜者は年中絕えない。笠利村の奄美岳の頂上には

阿摩美姑天神最初天降地

と刻した、石碑が建つてゐる。之は南島に傳はる神話であるが、大島開祖の志仁禮久、阿麻美姑の兩神は、大和民族の祖神の枝流であると云はれてゐる。

大島では各地から、古代の石斧や土器が發掘される。大正十五年の秋、私が龍郷村で發見したアイヌ式の土器三點と石斧一個の研究に依つて、アイヌ族の全盛時代、卽ち今を去る三千年の昔、大和民族が北進せざる前に、日本本土から九州まで擴がつてゐたアイヌが更に大島を經て、琉球まで南下したといふことが、琉球で發見されたアイヌ器物三十八點の研究と相俟つて、愈〻明らかになつた。

この外に、大島語中のアイヌ系語音や、又人類學者の、大島島民の血液研究に依つて、南島民族に、アイヌの血が復合してゐることが明瞭になつた。

更に笠利龍郷兩村(大島本島の北部)で現に使用されてゐる刳舟が、古代の大和民族が使用した、縫舟時代の刳舟であることや、大島語中に、多くの和詞と、和詞系の脫音語、訛音語、重複語等が、大島語の基本となつて、古代和詞の原型を保存してゐる點からして、大島には、アイヌの次に大和民族が移住して來て島地なるが故に、二つの民族が復合して、大島島民をつくつたのであると思ふ。

文永三年に大島は、琉球の英祖王に入貢して、琉球王國の屬領となつた。文永三年後、慶長十四年に至る、凡そ三百四十年の間の琉球間切政治や乃呂久目祭政時代に於て、大島には琉球文化が流れ込んで來た。

この時代に琉球中山王尙察度が、支那に通じ明の冊封を受けるやうになつた正平廿四年(西暦一三六九)頃から、琉球から支那へ派遣される官生や商人、又は支那から琉球へ送つた三十六姓の人(三十六姓の者は、久米村に住み琉球政治にも携はり、後に絕大な勢力となる琉球では之等の人を久米村のスンヂャーといつた。スンヂャーとは支那語のスーチェ秀才の意味)を通じて支那文化が輸入された。

其時代に、琉球首里王府から大島の間切役大屋子に與へた轉任の辭令書に

志より乃御み事
かさ里の志よりの大やこは
一人きせ大やこに
たまわ里申
志よ里よりきせの大やこの
方へまいる
隆慶二年八月廿四日

隆慶は支那年號である。右の辭令書の、隆慶二年は日本の永祿十一年、正親町天皇の御代、足利義榮將軍の時代に當る。右の文を譯すると

首里の御詔
笠利の首里の大屋子は
一人喜世大屋子に
給はり申候
首里より喜世大屋子の
方へ參る。

志よ里の御み事
せんとうちひかまきりの
志よりの大やこは
一人うすくの大やこに

たまわり申
志よ里よりうすくの大やこの
方へまいる。
萬暦十六年五月十六日

萬暦も支那年號、日本天正十一年織田信長時代に當り。右の文を譯すると

首里の御詔
先當地東間切の
首里の大屋子は
一人宇宿の大屋子に
給はり申候
首里より宇宿の大屋子の
方へ參る。

との意味である。斯くの如く大島は、支那に隷屬した琉球の間切政治を受けてゐたので、大和民族の血を受けた大島へ、支那年號の辭令書が飛び込んだのである。

琉球尙眞王の(文明八年—天正十七年)乃呂久目政祭一致時代に、乃呂久目の宗教が大島に入り、又支那から渡つて來た蛇皮線も大島に輸入され民謠も盛んに謳はれ、島民は平和に暮してゐた。

この時代に、永正十三年(西暦一五一六)備中連島の住人三宅國秀が、琉球征伐を企劃して、兵艦十二隻を率ゐ、薩州の坊津港に寄航した。之を聞いた島津氏が、早速三宅國秀の琉球征伐を妨げたので其目的は果されなかつた。また天正九年(西暦一五九一)秀吉が征韓の兵を起した時、

嘗て、琉球王に擬せられた、龜井玆矩は、秀吉に琉球征略を請願した。島津氏は驚いて、細川幽齋と石田三成に依賴し、琉球は自國の附屬との理由を陳述させて、之を拒絶させた。この外に關ヶ原役後慶長九年薩摩に寄寓してゐた、浮田秀家が、島津忠恒に自ら琉球王たらんことを希つた、島津氏は、笑つて之を許さなかつたので、秀家は其家臣と計つて、ひそかに發して、琉球に向ふ途中暴風に遭つて難船した。斯くの如く琉球王國は、內地諸大名から、征略の野心を向けられてゐた。

島津氏は、豫てから、琉球征略の野心を抱いて、其時期を待つてゐたが、幸ひに其時期がきた。天正十九年に、秀吉は朝鮮征伐を行ふ前に、島津義久に命じて、琉球兵を徵發して出征させやうとした。島津の老臣が評議をして、戰爭に經驗のない琉球兵の代りに、兵器を出させるやうに上申して許可を得たので、琉球に使者を立て、七千五百人の兵員十ヶ月分の糧食を肥前の陣屋に輸送する事を命じた。琉球では之を明國に報告して、兵糧の輸送をせず、再三島津氏の督促に逢つたので、文祿三年に、窮國疲民兵賦償出の途なしとの理由で斷つて仕舞つた。

慶長十年に尙寧王が、明國の冊封を受け薩摩に對し疎遠になり、其上島津の使節に侮辱を加へたので島津氏に戰爭の口實を與へた。(伊波文學士の著書に據る)

島津氏は、琉球から戰爭の理由を與へられたことを內心喜んで秀吉に右の理由を以て琉球征伐を請願した。秀吉から其許可を得て、慶長十二年、朝鮮との媾和が成立するを見て、島津氏は、愈ゝ出征の準備にかかつた。十三年の秋には全く整つたので、慶長十四年二月二十三日、樺山左衞門尉久高、平田左衞門尉增宗兩名に、三千の兵を百餘艘の船に乘せて、鹿兒島を出發し、奄美大島を征定して三月下旬に琉球に着し、那覇

に防備のあることを知つて、北進し四月一日に運天港に上陸して、尙寧王以下百官を捕へ俘囚として、二ヶ年間鹿兒島に止め置き、琉球は尙寧王の留守中に、島津氏の手で自由に料理されたのである。

慶長十年に大島宇檢方の人直川智が、琉球へ行く途中、暴風のために吹き流されて、支那福建省に漂着して甘蔗苗を携へて歸り、大和濱(大島本島中央西海岸)に栽殖して慶長十五年には砂糖が製造されたので、之に目をつけた島津氏は大島を藩の製糖工場として、慘酷極まる搾取壓政の糖業政策を布いた。

慶長十八年に、大島笠利に奉行假屋を設け代官法元仁左衞門を送つて、大島を治めさせた。元和元年に河越將監、同三年に河上彦左衞門等が來島した。

島津氏の糖業政策に依つて、大島の水田は甘蔗畑と變り、島民は蘇鐵の實と、唐いもを常食として、砂糖製造に奉仕した。古記錄に

砂糖と物品交換の手續

村吏の掟筆子等は立黍に依り、各人の次年の製出すべき砂糖額を豫定し、豫定額より諸稅糖を控除し殘餘の砂糖を以て購入すべき品物を書き出さしめ之を一の帳簿に書き寫し、間切役所で差出す。代官所は更に之を總括して藩廳に送達す、藩廳は之を仕入れて島地へ送る、其物品は代官與人横目役立合ひて、受取り之を註文者へ分配することを配當と云ふ。

とある。當時日用品に島民が如何に不自由をしてゐたかは、當時の民謠に

線香のねんだな
松木の葉ば燈ち

山川觀音丸や
二番漕ぎ願ふや
はれ遣らせば來い〳〵。

といふのがある。其頃の航海は、一年に二度觀音丸と云ふ藩の船が、山川港と大島を往復してゐたので。佛檀にあげる線香がなくて、松の木の枯葉を、線香の代りにしたと云ふ程日用品の不足を嘆いてゐたのである。

薩藩では黒糖を高く賣つて、其金で、物品を大阪から安く仕入れて來て、大島で黒糖と交換した。當時の記錄に

砂糖總買入に付品値段之覺

御買入物品代付(但主要品)　文政十三年寅九月四日

百田紙一束に付　代糖二十五斤
半紙一束に付　同　二十斤
大丸墨一丁　同　九斤
縞晒一反　同　八十斤
一寸針百本　同　四斤
二寸針百本　同　六斤
吸煙管一本　上　同　十八斤
　　下　同　十五斤
小筆一對　上　同　五斤
　　下　同　三斤
風呂敷一枚　大　同　二十八斤
　　小　同　十八斤

鍋一丸　代糖　二百斤
ローソク一斤　同　二十斤
茶一斤　上　同　二十五斤
下　同　二十二斤
摺鉢　同　六斤
酒一沸(一升)　同　二十五斤

斯くの如き手段を以て島民を苦しめ、虐使して尙延享二年から、大島外四島の租税を、米穀の代りに砂糖を納めさせ、一斤に付米三合六勺の割合に定めて徵收した。

文政二年には、大島、喜界島、德之島三島の産糖を全部藩の手で買ひ取り、他藩に密賣した者は死刑に處した。米穀外一切の日用品は、藩から給與し、藩吏の掠奪された島民は甘蔗と蘇鐵の實で生命をつなぎ、毎年夏の旱魃の時は、山の木の根まで掘つて食したと傳へられてゐる。

島津二十五代(延享二年―天保四年)重豪公の勸農使として大島を視察した得能通昭が、『腰を下して足洗ふ家もなく民の有樣は朝夕の食に惱み磯の藻屑を食し渴さへ濕し難き程なり。』と報告してある。當時の島民の生活は悲慘そのものであつた。大島の民謠に

大和濱降り口なんにや
餅米うばんぬあむちろが
うりがかてむんな
きのこきくらげに
さいたなが。

と歌はれてゐる。大和濱の入口に、米の飯があるさうだと、米の飯の噂が、島中に擴まつて歌にまで謳はれた時代である。

屋んくび下りややとんつぶる
あまだ下りややいゆんかまち
おもれ〳〵うゝちゆんきや
煮ちうて上しろいゆんかまち。

草葺小屋の軒にぶら下つてゐるものは唐なす。爐の上に吊つてあるものは魚の頭お這入り〳〵御年寄衆。魚の頭で料理して、御馳走をしませう。との意味である。其頃の島民には、魚の頭と唐なすの料理が最上の馳走であつた。

年や寄ていきゆり先や定まらず

荒波に浮ちゆる船のごとに。

生活上の不安を常に思ひ惱んでゐた自分達の人生は、恰も荒海に浮いてゐる小舟のやうだと嘆聲をあげてゐる。日常の生活に苦慘を味つてゐる島民は、人生を悲しく暗く見た、そして、心の安住を來世、（奄美大島古代の葬制參照）と戀愛に求めた。而して、二世紀半の受難時代に、勝れた多くの戀愛情歌を生んだ。

すばやどあけて加那待ちゆん夜や
夜嵐や過ぎすか加那や見りやらむ。

戸を開けて、戀人を待つ夜、夜嵐は過ぎて行くけれども戀人はどうしたのかやつて來ない。

うきと寄り草や風下で寄りゆん
寄て來玉久金抱ちて話そ。

浮揚具と水草は風下に寄つてゆく、寄つて來なさい抱きあつて、話しませう。

三味線な出じて歌まちゆり

吾ぬや何う待ちゆり
外知らぬ加那待ちゆり。

三味線は出て歌を待ちます、わたしは外の知らない戀人を待つてゐます。

これ程の遊び組み立てゝからや
夜の明けててだの上るまで。

恁う云ふ風に、自由戀愛に人生の活路を見出した島の若人は、夜の月と戀人と歌と三味線とが、生活意識の要素となつて、玆に貞操觀が

一度染みがでや雪水の心
二度と染でからや吾玉久金。

一度肌を許した位では未だ淺い、二度と許してからあの人はわたしの戀人である。と、一度位貞操を破つても何んでもない位に考へるやうになつて來て、結婚に對する態度が不眞目になり、離婚されても何んとも考へない位になつてしまつた。之は藩政時代のことである。

島津氏は、更に島民の民族的自尊心を傷けるために、古來大島に傳はる文書記錄を燒却した。奄美史談に

東山天皇寶永三年、島津氏の命により、島民の所持せる系圖及び文書を取り揭げ記錄奉行にて之を燒棄せし由

大島政典錄に

大島、喜界、德之島、沖永良部島右四島人民の內家柄可差立先代の由緒有之者は、不殘系圖可差出旨申渡可有之、尤も御藏物に被召上儀にては無之必可被返下候、內々致其心得持合之旨差出候樣有之可然候

一、系圖文書無之者の內にも、差立百家筋の由緒有之者委細書記可差立事

一、寺社方々の儀も右同斷

右之趣所中不洩樣申渡、無滯差出候樣島中へ申渡し書付狀にて可差越旨寶永三年戌十月廿日堀甚左衞門殿御取次を以て、代官川上孫左衞門代被仰渡候事

右の如く系圖文書を一應取纏め島中の家柄先祖等取調べの上再び差出人に返し下すと僞り、其實は、奄美史談に記されてある通り燒き、捨てたのである。斯くして、奄美大島の島民は、史的背影を奪はれたのである。

民族に歷史がなく、宗教がなく、文學がなく、もしあつても之を實證する、記錄文獻がなかつたら、其民族は文化史上に、自分の生命を永遠に生かすことはできない。

島津氏が、島民の系圖文書記錄等を取り上げ燒棄したことは、島民が前屬琉球を慕ひ風俗習慣に至るまで、嚴守してゐたので、琉球と大島との精神的連絡を斷つ爲めである。と伊波文學士も云つてゐるが、其外に、最大の目的は奴隷的に酷使するために、島民の民族的自尊心を奪ひ取る手段に過ぎぬと私は考へる。

斯くして、大島島民は、生命の譜たる系圖は奪はれ、民族史上にあまり類例のない蔑恥を加へられたのである。

島民は島津氏に、古代の史實を語る記錄系圖は奪はれたが、大島には吾々の祖先が、過去數世紀の間に、其生活を歌つた、生きた考證資料三千餘首の民謠が殘つてゐる。

斯くの如き史實を經、藩政時代の民族的の受難期にあつて、輸入された北方文化と、其前に輸入された南方文化は、大島に於て復合され、生活樣式、宗教葬制、戀愛結婚、民謠舞踊等凡ゆる方面に、大島特有の文化を生

み今日に及んでゐる。

南島語と詩歌

萬葉や、琉球のおもろが、古文學ならば、奄美大島の歌謠も古文學である。然らば、古文學としての大島歌謠の價値を問はれるなら、私は、大島の歌謠は抒情詩として、萬葉以上の雅趣と情味があると、答へるに躊躇しない。

それは大島の過去、文永三年後慶長十四年に至る、凡そ三世紀半に亘る、琉球服屬時代に於て、移入され、又模倣された八八八六句調三〇文字の琉球系歌謠と、慶長十四年後明治四年の廢藩置縣に至る、凡そ二世紀

半に亘る薩藩治下時代に於ける、民族生活の半面を語る、純情素朴な民謠の歌詞である。

私は、古文學としての、大島歌謠の價値を云々する前に、歌謠に綴られてゐる大島語の語原を訊さねばならぬ。

私の調査した範圍に於て云へば、大島島民の使つて來た言葉は、鎌倉時代と、其以前の國文學、卽ち徒然草、源氏物語、枕草子、萬葉集、古事記其他の古文學に現れた、大和民族の言葉と、其言葉の內、一音又は二音缺けた脫音語と、南島特有の文法とアクセントに訛つた訛音語等の外に、琉球治下時代に先方の歌謠や尾類の歌舞、のろくめ祭政、間切政治施行などに依り、移入された琉球歌謠や、のろ祭詞、又はおもろさうしや、混効驗集などに綴られた古琉球語が、大島語の基本となつてゐるのである。

この外に、大島語の內には、先住民アイヌ族の殘したアイヌ語が、地名と地形の名稱に殘つてゐる外に、琉球治下時代に在つて、中山王察度が支那に通じ、明の冊封を受けるやうになつた正平廿四年頃から、先方の文物、風習、器樂(三味線)と共に、琉球を經て、大島に這入つた支那語系の言葉も混じてゐる。

斯くの如く、長い年代に於て、大島に流れ込んだ各民族語の枝流を、混合して出來たものが大島語である。

私は、玆に南島語の題下に、主として大島語を論じてゐるが、南島語と言へば、其範圍は大島に限られてはゐない。彼の混効驗集(古琉球語の辭書)おもろさうし(古琉球の神歌)に綴られた古琉球語をも、南島語の圈內に入れなければならぬ。

何故なれば、大島は文永三年後慶長十四年に至る凡そ三百四十年間の、琉球服屬時代があつた。其時代に於て、曩に述べた通り、のろ祭や、琉

球歌謠風習等の移入に依り、大島民族生活には三世紀半に亘る琉化時代があつたのである。

斯くの如く、大島は過去に於て、土俗宗教的に、琉球と同一譜系上に立つてゐるから、日常語は兎に角、官用語として、又は、社交用語として、のろ祭詞や、歌舞歌詞に、琉球語は、盛んに用ゐられ、慶長十四年に薩藩の手に、移つて尙、ひそかに、のろ祭祀は行はれ琉歌は盛んに歌はれた。（現在の大島歌謠の三分の一は、琉歌と其模倣である。）そして又、琉球の偉人、蔡溫の書いた、御教條は、薩藩治政の許にある大島の若衆達に愛讀され、寺小屋式の教所では、同書を薩藩の遠島人達が講義した程である。

蔡溫の御教條は、彼が三司官の職に就いて四年後、卽ち雍正十年十一月十八日の日附を以て、攝正三司官の名で、評定所から發布した、琉球語的候文の國文讀本の如きものであつて、同書は、尙泰王時代に至るまで、農村で一定の期日を定め、其講義を聽かせたと云ふ。

私の持つてゐる御教條の古本には、具志頭親方、美里親方、伊江親方、小谷王子、四名の署名がついてゐる。

斯くの如く、大島語は、過去數世紀の間に、古琉球文學の教化と訓練を受けて、今日に及んだのである。

然るに、近年に至り、國語教育の普及に從つて、前述の如き古文語的南島語は、現在の大島常用語から、影を潛め、僅かに、歌謠やのろ祭詞に其影をとゞめ、歌者自身でさへ、解釋のできぬ死語となりつゝあるので、私はこれらの死語を復活させるために、又は一方南島に於ける民族生活や、民性、自然情景等を紹介する目的で、南島民族の生命の譜たる南島語を綴つて、おもろ風の詩歌を作つてみた。大正十五年一月沖繩朝日新聞の新年號に掲げた年頭祝詞が其一例である。

年頭祝詞

あら玉のみてだ
大島照り亙たて
日本照り亙たて
世界照り廻ち
照り亙たて
照り廻ち
終りのねん
倖せのみてだ

あら玉の年や

元日から
ほこらしや
汝あきやも
ほこらしや
吾あきやも
ほこらしや

ほこらしやあすが
世界照り廻はる
みてだのごとに
世界のはてまで
榮えらち

世界の終りまで
榮えらち
汝(なぁ)あきや（きやは複數）
吾あきや
榮えらち
親兄弟んきや
榮えらち
島つちゆう（島の人）
榮えらち
大和(やまと)つちゆう（内地の人）
榮えらち
日本中

世界中
榮えらち(絵はれ)たぼれ
あむしられ（神を尊敬する言葉）
しよしられ（右と同意）
てだ子(日の子)拜ま

私はこの年頭祝詞の中に、南島民の抱いてゐる、民族的の大精神、即ち世界平和を望む南島民族の思想内容を十分に、現したつもりである。

南島民族の生活情景と、民性を眞に現すには、南島民族の生命の譜たる古文語的南島語を、詩に、歌に、復活させなければならぬ。而して、南島語に秘められた、過去三千年の歴史を持つ、南島民族の魂と、民族心理に觸れるには、南島古文學や歌謠の研究に俟たねばならぬ。

この意味に於て、南島古文學を研究し、南島語の詩歌を作ることは、南

島民族心理の研究となり、進んでは、國文學やおもろの研究となり、南島民族史の研究となるのである。

茲に、自作の詩を掲げて、歌詞に綴られた單語の語原を訊ねてみる。

ねたさ

加那待ちゆん夜や
夜更けがで
眠られず
月や西下がて
夜鳥や啼きゆり
ねたさ
ねたさ
吾んなきもやち。

解釋

加那（かな）—琉球古語にして接尾美稱である。

一、太陽のことをてだ、くめがなし、月の事をおつきがなしと言ふ。

二、男女に限らず尊貴の人名に接尾美稱として附す。のろがなし、あむがなしなどの如し。

三、若樣又はお孃樣と言ふ程の意味もある。

大島歌謠に

草葉の露だむそ昇るてだ待ちゆり
吾（わ）ぬやぬう待（ま）ちゆり外知（よそし）らぬ加那（かな）待ちゆり。
荒馬乘り慣（な）らて小馬乘られんにや
加那と住み慣らて外（よそ）と住まれんにや。

歌謠では加那は愛人となつてゐる。

加那の語根は和詞かなし愛する意にある。

十訓抄上に

武正といふ舍人のかなしくしける子の煩ふ事ありて云々

今昔物語二十六

月みちて端正美麗なる男子を産めば、父母此を悲しみ愛して(中略)其後は彌よ此兒を悲しく(中略)四五歳計の娘有ければ、其をも此兒を此く悲しくすれば云々

源氏物語夕顔の巻

われかなしと思ふむすめを云々

大島歌謠

わつたり談合しゆてひんざろやかなし

ねぶり―眠ること。和詞である。

ねぶられぬ―眠れぬ意味。

徒然草三十九段

念佛の時ねぶりにおかされ行をおこしたり云々

帚木の巻

小君はとおしさにねぶたくもあひてまらありくなり云々

ねたさ―忿懣の意。うらめしいと云ふ程の意味もある。和詞である。

徒然草百七十五段

かくからき目にあひたる人ねたく口惜しく思はさらむや云々

葵の巻

ねたさなんと給へば云々

枕草子

かへさまに縫ひたるいとねたし

枕草子ではねたさもくやしいぢれつたいの兩義を合せた程の意味を現してゐる。

わんな―吾はとの意。和詞の訛音語である。

大島では吾をわん吾物をわもん、其の語尾のん、はわもののが訛つたのである。

萬葉卷一

吾をまつ津ばきふりすなゆめ

註に吾をわとのみ言ふは古語なりと有、和詞にては我の物をわもの、と言ふ也とある。

きもやち―きもは肝の字を書く。心の意味。

やちは燒くの意味、

きもやちは思ひこがれるの意味である。

大島歌謠に

あがれ明かゞゆつさ月どあかがゆん

きもいしよがりしんしよち道に立つな

きもいしよがりは、心急ぐ、卽ちきもは心

混効驗集に

きもいちやさを肝いたきせ、腸の心也

句双紙に

泪出痛腸とある

詩ねたさの意譯をすれば

君を待つ夜は

夜更けまで

眠られず

史實と文化

月は西に落ち
夜烏は啼くよ
ひとり寢の
つれなさや
吾は悶えつ。

奄美大島の古歌

縁の歌

こねだこのごろや夢しげさあたむ
きもちやげぬ加那ばをがもち思ふて
汝きや拜むことや夢やちゆむ見りやむ
神ぬ引合せに汝きやば拜がで
ゆうべ夢見ちやむかにさて見ちやむ
きもちやげぬ汝きやば拜もと思ふて
夢ぬふれもんが加那うすばと思うて

うづて空ししろ手うちかけて
朝露や降りて草ぬ花染みゆり
吾ぬや汝きやうすば寄とり欲しや
加那やありながら此座居てきやしゆり
言ばや道でいきをふときに
いばや道でいば人だめどなゆる
今拜む時に如何がしゆん加那
今拜む時に染み欲しやすが
肝ちやげの里が居らばきやしゆり
きじる身ばなとてうつる聲きけば
忍でうもる加那やいきやなさん
島一つあれば道往き逢ふて見ゆり

戀路ひだめれば自由やならん
岸影のお月照り廻り廻り
ゆき廻り廻り拜み欲しやぬ
加那が島吾島一つあれば
のてにこのしのぎ吾ぬやとりゆり
隔めらばとても千里隔めらで
この近さ居てむ節やねえらむ
千里ある道や近ふなちたぼれ
道ぬうまれしゆや吾ぬどなりゆる
拜みちやさしとて加那拜む時や
ぬき糸より細くなりどしゆる
吾身や渡海隔め分れやに居れば

吾胸や吾が中に思ぬながす
加那が玉しさに一つば折りて
そとに枝させば人ど折りゆりる
うよりから戀や雨なしぬことに
しよしら戀ならんよそと染みゆめ
肝ちやげぬ加那と縁ば引き結で
染みつかんうちに退くが凌ぎ
露と義理すれば花やさをれゆり
吾ぬや加那と義理うりがごとに
濁り川の水や底まで知らぬ
加那が仲うきも探りぐるしや
流れはり川に石浮けて見ちやむ

誰が出じて吾きもさどて見ちやむ
男のしのぎてに云へば
吾が取りゆる凌ぎ取らち見ぼしや
女身ぬ凌ぎしのぎてに云へば
吾が取りゆるしのぎ取らち見欲しや
百名立つことや白濱ぬましやく
加那をがむことや月に一度
白濱ぬましやく月ど紛らしゆる
尙きも紛らしゆす加那とやゆる
八日行濱ぬましやく照る小あじ
緣づれどまさり戀ひしわらべ
八日行濱にうしこみうちやむ

よそが手ぬ手數とりやするめ
八日行濱ぬもん草種よ
くわいといつまでもありどしゆる
八日行濱の思ひむつれ草
肝ちやげぬ加那むつれぐるしや

思ひ文の歌

今日ぬほこらしやいつもより勝り
いつも今日のごとにあらちたぼれ
いつも今日のごとにあらば玉久金
のてにこの凌ぎ吾が手取りゆり

凌ぎ取りてに親や生ちおかぬ
うぬ凌ぎ取りす汝肝さらめ
さらば玉久金うれ程にあらば
五日十日隔め聲ぬあらまし
五日十日隔め聲やしさやれども
屆けらぬよそど恨めしやん
さらば玉久金うれ程にあらば
思ひぬ文書きやに持たちたぼれ
思ぬ文書きやに飛ばしぶしやあすが
もしよそ上に飛ばゞきやしゆが
思はぬ文書きやに只飛ばせ〳〵
思はぬ文なれば吾上におちろ

吾が持たぬ手紙硯石水と思ふな
目泪おしぬがて書ちやる手紙
汝が持たぬ手紙手ぬ裏に取り見りば
泪におそはれて讀みやならぬ
泪におそはれて讀まらだなやらば
隣りよそ賴で讀まち聞きよ
隣よそたので讀まち聞ち見りば
眞實のとろや書ちやねらむ
眞實のとろ書きや書ちやれども
筆のあやまり書きおとす
眞實のとろ書かだなしゆて
筆ぬきもちやけば百名立てゝ

花の歌

八つと九つと花緣ば結で
約束のまゝに出ておもうれ
約束のまゝに出で欲しやあすが
嚴し親加那之うまへの近さ
きびし親加那之うまへの近さらば
書ぬ約束の花や戻せ
書ぬ約束の花戻そすれば
花もどす道ぬねらんしよしら
約束ぬまゝに來ちやむ玉久金

うづで家戸開けて入れてたぼれ
しんもとば植えて根のさゝん内に
こえんせん掛けて誰がしよしら
あたりかけうちに花の子ば植えて
思ひ子きじるしや無理やあらめ
さらば玉久金うり程にあらば
出じてしのまれらば聞くな
きびし親がなし許しぬ有らば
きどがそと出じて話ちもどそ
きどがそと口やよそが道だもの
小松木ぬ下でいともしやびろ
小松木の下やよそが道だもの

吾家ぬ寢床にでいともしやびろ
朝寢して朝枕元見りば
吾がうかぬ花ぬ咲くが不思議
枝元居りやに障子がもと見りば
さら黃金障子うつが不思議
障子がもと居りやに庭向て見りば
あやはべるもどや花と染ども
花下草になとる玉久金
花折りやなつけ見りがきやびろ
花ぬ下草になとるぶしやあすが
花もゆるよそが踏まばきやしゆが
花折るよそや肝ありてもの

花やうしやげとてまどゝ踏みゆる
あたり野櫻やよそ知りて咲きゆり
深山野櫻になとるしのぎ
深山入口に椎木うちよち置かば
うりさどり〳〵とめておもれ
吾ぬや奥山ぬ一花やすが、
きやしが思ふ里やとめておもちやが
奥山に咲ちむすぎ山にさちむ
色とかくされる匂ひ知りて
吾ぬや奥山きり石溜る水よ
ゆくしぶしやねらぬ苔草の生えゆり
さらば玉久金ゆくし欲しやねらぬ

玉久金と云ひかけてゆくち遊そぼ
逃げ馬てば逃げ馬主や定まらぬ
主つかね汝きや定めぐるしや

思ひ出の歌

吾ぬや譬ゆれば籠の鳥心
世間徘徊もならぬ凌ぎ
徘徊ならぬ汝きやたんげへやならぬ
吾ぬや吾が暮らしするがまさり
汝身や汝が暮らしすれよ玉久金
吾ぬや吾が暮らし凌ぎとらぬきやしゆが

凌ぎ止だと思へば病まぬ身も病みゆり
　凌ぎ振り捨てゝ遊びもどそ
凌ぎ振り捨てゝ遊びやでと思へば
　今ぬほこらしや何に譬へる
今日ぬほこらしや物に譬ゆれば
　白毛年寄りぬ若さ心
忍ぶ山路の二つあてらまし
　何よてよそ知りて百名立ちゆが
忍ぶ山道心骨や散らすとも
　尙加那見ぶしやくねやならぬ
遠さある路も近くひき寄せて
　きもちやげぬ加那と話し欲しやぬ
遠さある道ぬ近くなされゝば
　吾ぬやこの凌ぎ一人取りゆり
住用くらかみ又糸緣ぱ結で
　坂川に思へあくで居たむ
坂川に思へあくで居てむ
　川や干るどもが緣や十一代
かなげおしかくち今によそ知りて
　傷つきぬ我身や磨きぐるしや
さても玉久金要らぬ世話するな
　よそにかゝはる傷やあらぬ
思てしん立たぬことや振り捨てゝ
　緣ぬ始りや忠孝ぬ道よ

吾身ぬ碎け程忠孝する人は
年ぬ寄る程に業ぬ基
思ふて居る加那に聲や云ちみらぬ
云やば聞ちくれゝ玉ぬうなりや
坂へだめ緣やいらんことさらめ
云ちやすことも道に散らそ
互に思ひごとや道にうち散らち
よそに現はれてかくし苦るしや
よそに現はれてかくちかくされめ
互に親知りて染みまさり
晝や思ひ出しゆり夜や夢見ゆり
肝ちやげことや忘れ苦るしや

十日や廿日や加那と取り染みに
ぬきゆりやだと誰と染みゆり
十日廿日汝きや拜まだなやてむ
吾身やよそ肝や持たぬしよしら
言葉きよぎよと云や言ゆるども
吾ぬ(ワレハ)や加那心さどて見らぬ
汝身(ナミ)や吾が心知らぬと思へしよしら
吾ぬや汝が心をさど(サグ)て見ちやむ
吾ねや加那心見りや見ちやるども
凌ぎよそ聲にうつると思ふて
いきや(ドンナ)なしげく外聲(ヨソゴエ)あて(デアツテ)む(モ)
汝が自由ぬ吾身や吾身ならぬ

加那がうり程に眞實にあらば
　吾ぬむ加那外に心持たぬ
日かず月かずに御願ひしやげな
　しよしらや行先や御祝ばかり
吾ぬや行先ぢ花數と染みゆり
　加那やよそ知らずしのぎ取りゆり
吾ぬや吾がひとり凌ぎ取りゆむ
　汝身や花數と染めよしよしら
六つやむつれ八つややつれゆり
　むつれゆる緣ど世帶や持ちゆり
人の玉久金今やいきや思ふて居てむ
　聲掛けて見ちむ自由やならぬ

言へば言ひ程一言に言ひ果てやならぬ
　互に言はざるに居りや勝り
かなし重ねればせわど重ねゆり
　迚も緣ぬ道や切りやまさり
かなし糸緣ぬ切ちむ切りやれゆぬ
　よそが目やかくち思ひのこす
よそが目にかくち思ひ殘そすれば
　里につながれて自由やならぬ
おしかくそすれば天と地や鏡
　影うつると思めばお恥かしやん

掛け歌

あらきやうがり吾ぬや歌や知りやびらん
　歌いやにたぼれぢぎぬうなりや
吾島ぬ慣れや加那と島一つ
　心うちとけて遊でたぼれ
村越えて吾ぬや遊びがど來ちやる
　肝ちやげの姿拜もと思ふて
けふのほこらしや何にかにや讐へる
　白枯れの花の露受けたごとに
白枯れの花や水かけて生きる

情かけみしよち活けてたぼれ
なさけかけ欲しやあてむ
　人の玉久金活けて何しゆうが
掛けてかけ里に落しがて入れて
　忍であけ染みし縁のごと
縁といば加那や神ぬ縁さらめ
　きもちやげが縁ど吾縁さらめ
縁ぬ戸ば開けて風ばなか立てゝ
　うきようづましゆす戀の嵐
浮世うづましゆすまたぬあらん
　眞實思ひあらばと思ふて
梅と鶯や枝ば折りしちゆて

花ぬ宿とりやに節を待ちゆる
節に待ちかねて肝變りするな
夢と面影と伽に召しよれ
昔世の月や立ちや變るとも
肝變り吾ぬやならぬど加那
約束はしちゆて肝變りする者や
うれとずに誠誰のかわり
肝ぬ上に書きゆる文字や讀めども
加那と約束や讀みやならむ
思へば焦れゆり云へばよそ知りゆり
よそ目は恥じて紛るよ加那
思はゞもまじんそらさばも互に

まされ口互に思てたぼれ
思ふて思はぬ人ぬ玉久金
見あげ見おろしぬ思ふたばかり
見上げやに見りば若松の小枝
又も見上ければ吾玉久金
春や花の盛り夏はかしやぬぬむぞ
秋はてゝさらめ冬はうふ西
かずならぬ吾ぬや退ちゆて拜む
里よりは外に肝や持たぬ
女綾はしやがに言よりども
ます花があればあれよこれよ
自由ならぬ吾身やあのよのはべら

花に染みかねて露に濡れろ
花も世の中に自由ならずさらめ
露する花や露とすみゆす
露する花のさをれゆす見れば
吾ぬや加那と義理しちやならぬ
五百世のとゝ義理しゆり玉久金
兎角ひと節や廻るさらめ
せつまちやに居れば互に年寄りゆり
年寄らぬ内に紛るよ加那
ぬがやしよしらや節ぢかくれみしよる
浮き船ぬ目よりまくばみむぞ
思ひは玉久金浮船になとる

待ちゆる戀風と伴れて來やびろ
浮船に焦れるときのまぬこへろ
吹き合す風みあらしゆもの
吾が思ふことや切りでから木草
笹草のなびきするしのぎ
肝ちやげぬことのあらん思はれて
仕事まへおちよちおぼろ月夜
加那こと思ふて胸に松植ゑて
吾がませのうちや憂き夜明かす
肝ちやげのことぬ思はるゝ時や
枕浮船になちゆて暮らす
下りはる水や上りよこすども

きもちやげぬ加那やよこしならん
ゆうべ世の中や人ごとのうふさ
情よりするな黄金みもど
七八十なても浮世忘れゆめ
忍びやすれども御恥しやん
千鳥啼き聲や伽やなりゆりども
加那が事思へば伽やならん
あと世までも加那と自由なものなれば
約束のまゝに一つ枕
知らぬ縁結ではたと退かれらぬ
今も加那そば寄とり欲しや
別れゆる袖やいつかさびしみしよれ

加那が身の匂ひ吾ぬにうつそ
色々に加那がおてらばむはかれ
しちやる約束や百年までも
加那が腕まくら朝夕しならて
あけや腕まくらかまちいちやさ
朝夕染でうちやる加那と別れと思へば
今日やぬがかにやる暮しぐるさ
暮らし苦るさあても戀路隔めれば見欲しや
うらきりやしやらんきやしゆり
枕ひき寄せていとまごひ言葉
加那身と吾身と思てたぼれ
眞實のあらば立ちてもう戀に

うらあけて照らぬ月の光
越路隔めても情忘れゆめ
朝面影やかづへならむ
立つ波ぬ'しげく渡らん時や
夢やちゆむしげく見せてたぼれ
庭に照るお月まろに照りうつち
加那が御情や吾身にうつそ
自由ならんことぬかねてから知りば
ぬてに玉久金ものや思ふはす
加那と吾が身にさわる中花や
咲き散らちたぼれ戀の嵐
枕名ぬ'立ちて別れゆる際や

加那やみしゆる暮らしぐるしや
泣くなといちも吾が泣かずうきゆみ
加那と別れゆるきわになれば
深緣ば結でもゝと行くまでも
元氣枝枕あの世までも
朝夕思めよりやて身體ならべをれやに
別れやに居ればにやきやしがすぎる
袷綿衣に匂ひうつちたぼれ
歩りき先々ぢ伽にしやびろ
戀に焦れてや吾ぬや泣きやびらん
加那がお情のあてど泣きゆる
加那が寢じきに嵐吹き越して

躁れゆる吾身の大わきと思て
夢見りや起きて涙袖しぼて
加那御別れなればぬてに泣きゆり
加那がなり振りぬ筆に及ばれば
吾ぬや書きうつち拜み欲しやぬ
形見取りかわち忘れやにすれば
思ひまさり〳〵忘れぐるしや
寢座敷に殘る加那が面影や
朝夕息ぬかん目尻下がて
加那拜がで吾ぬや戻り道いきば
降らん夏ぐれぬみ袖しぼる
待ち受けて朝夕加那とすだらまし

あの世いくまでも忘れぐるしや
言ちも出さらぬかくちかくさらん
朝夕吾が胸にくたそしのぎ
面影ぬ立てば歌にお伽みしよれ
うよそから戀のあらばきくな
暮らさらん時や書物讀んで暮らせ
あけやきじの身やちゆもならぬ
ふつと思ひきゆめ玉久金加那や
吾ぬや道柴の露に濡らち
天と地とさへ霜降りて染みゆり
ぬがや思ひもどや自由やならん
肝ど花あても情忘るゝな

緣とかよはちゆて思ふてたぼれ
生き死にごともたしなまんよ加那
加那がこと思ふて死なば別れ
譬へよそ知りて歩るかばも別れ
してうちやる契りあへちなゆめ
うす風になびく糸柳やても
結すぶ糸緣のゆるしなゆめ
きじの身の加那に情かけらちやむ
繰り返し〳〵ものや思ふて
御情の緣につながれてからや
切ちも切られぬ金の小繩
くろかねの小繩切ろと思ふば切ゆり

加那と吾が緣な切りやならん
しぢう二十の娘に吾が戀ばかけて
知る人もねらん吾が肝ばかり
吾ッが持たす手紙すゞり水と思うて
目泪しやに書ちやる手紙さらめ
汝ナが持たす手紙手ひらにうけて見れば
泪におそわれて讀みやならん
餘り戀しさに淋しき川渡て
降らん夏ごりにみ袖しぼる
加那をりみ欲しやにあがとから來ちやん
加那や久知屋ぐまり泣ちどもどる
玉久金うれ程に思はゞ

糸目から針目しのでうもれ
糸目から針目しのびしやすが
汝身(ナミ)がきじろ身(カマシイヒト)のをらばきやしゆり
吾ぬやなまができじろ身やもたぬ
まき牛のごとに吾自由さらめ
きもちやげぬ加那(ソレ)がうれ程にあらば
夜半の風別れしのできやびろ
ゐりからど入ゆる袖からど入ゆる
ま胸ねらふ風のお懐しや
雨しうだりに心散らされて
きもちやげの加那といだえの
汝(アナタ)みや浮舟吾(ワタシ)ぬやその錨

縁ば網さらめ離れ苦るしや
さだれ石の大礁眞石なて海草(ソリ)の生へがで
かわるなよしよしらもとのお顔

(意味不明の語は大島古語註釋參照)

大島古語註釋

あまみ＝大島の古名、阿麻彌又は奄美とも書く。海見とも古書に見ゆ。

奄美の名は開闢の神、阿摩彌姑に起る。あまみこは天孫(あまみこ)なり。

あまみこ＝阿摩彌姑と書す。南島開闢の女神なり。志仁禮久男神と共に、日の神に生をうけ、天より降り國を作り五穀を種蒔き、人間生活の道を開き、陰陽妙合生むの道を始め給へりと云ふ。口碑に依れば、あまみこ、しにれく兩神は笠利村の奄美岳(あまんでえ)に天降り給へりとあり。

あがれ＝東のこと。大島民謠に、

あがれあかがゆつさ月とあかゞゆん

肝いしよがりしんせよち道に立つな

村落の東の地名をあがれと云ふ。

あしやげ＝集會場。大島民謠に

喜界や六間切とよまれのあしやげ

中平に見りば阿亘木ばりや根ばりや

あやくまだらく＝古語はぶ(毒蛇)のことなり。祝女の祭詞に、

げすの子の、たまがりむんな、山いきば、あやくまだらく、いしよいきばゝくじらわんさば、いとちゞまき、

あらがる＝あらそふこと、腕力で暴れる。

源氏常夏の巻に、あらかふべくもあらずと有り。

あごかね＝幼き者を寵愛の詞なり。夕顔の卷に、

あかきみあか子と有をわか君わか子と云事かしく詞也と云々。

カンテメアゴ、菊恕金等の如き人名接尾美稱にも用ふ。

あしちや＝和詞にはあしだと云ふ。徒然草に、女のはけるあしだにて作れる笛には秋の鹿をよぶと云ふ。とあり下駄のこと。

あたら夜＝惜しき夜のこと。古歌に、

あたら夜の月と花とを同しくは

あはれしられぬ人に見せばや

あむ＝百姓の妻。卑しい身分の女を云ふ。

いと＝力を出す時の掛聲。勞働する時の歌大島民謠に

くるだんど歌がで歌ちあんにや

はる山戻りんぬいとどあん。

いゆ＝魚のこと。八重山西表島の湊節に

崎山のみなとに、

新村のとまりに、

みじよのいゆのつちやんど、

はたらいゆのつちやんど。

八重山でも魚を斯く云ふ。

いらへ＝いりえとも云ふ。答へること。伊勢物語に、

なといらへとせぬと云はなみたのこほるゝ目も見えず、

物もいはれず、と有り。

いしよびき＝口笛を云ふ。大島民謠に

いしよびき吹かばや出じて來よかなし、

いじて來らゝんばやいしよびき吹き戻せ。

いぎり＝賢い意。徹底的にと云ふ程の意味もあり。琉球語のいじり、おもろ言葉のゑげりやと同じ意味なり。

いめ＝夢のこと。古事記傳に、

古へは凡て伊米と云ふ由米とは云はざりき、と有り。西方村に伊米と稱する字あり。

いしびや＝大砲のことを石火矢と書く、大島では、老人達は今尙いしびやと云ふ。昔琉球では國王の道行に、石火矢を放つたと傳へらる。

いれがみ＝女の結髪に用ふる髢なり。混効驗集に、

むしんいれかみ共いふ髢の事也、とある。

うき＝浮揚具を云ふ。魚取りに用ふる網を浮かす椰子の實や、竹筒、等もうきと云ふ。大島民謠に

うきと寄り草や風下ど寄りゆん

寄て來玉久金抱ちゆて話そ。

うらはり＝舟のこと。浦走の意味。しまうらとみ、唐船の事。嘉靖三十二年やらさもりまうはらいの時みせゝる御双紙に見ゆ。

うちやげさじ＝頭布のこと。大島民謠に、

うちやげさじなてかしらそまぬよりも

あやくぶすいなて眞胸だかな

うふしま＝大島を斯く云ふ。中山傳信錄には鳥父世麻と有り、島語では大をうふと發音す。使琉球紀略には、大の字に倭捕殺と註す。

うやふじ＝先祖のこと。八月踊の歌に

昔のうやふじや島立ての惡さ

かなが島と吾島間切分ち。

うれましや＝和詞に、うらやましく羨敷と書く。羨は貪慕と註す。又

浦山敷ともたゞうらやむと云ふ時は心かはれり。呉竹集に

うらやむとは愛する心也、花をめで鳥をうらやむといへり。

うばん＝飯のこと。古語なり。使琉球紀略に安班とせるは或は粟(アハ)にあらざるか、然らばアバと音せしなるべしと文學博士新村出氏は古琉球の序に書いてある。飯を安班音譯して(アバン)のアがウに訛つてウバンとなつたものと考へらる。佛前に供へる飯を和詞ではウバンと云ふ。御飯(オハン)のオがウに訛つたとも考へらる。大島ではオをウと發音する。大島をうふしま、怖ろしやをうとろしや、御飯をウバン、混効驗集には、みおばに＝美飯の事也おはに共云ふとある。

うふさ＝澤山の意又は大小の大の意味有り。叢書「說鈴」第六冊に收むる所の張氏の使琉球紀略に語言二十餘箇を摘出せるを見るに大を倭捕殺(ウフサ)とある。

うわなり＝嫉妬の心。古代和詞にては後妻を斯く云ふ大島民謠に、

汝きや吾きやこま寄り合として遊べばよ
遊ばらんどしんきやうわなり心。

うらきりて＝寂しさの意。呉竹集に、

うめつらしきといふ詞うらかなし戀しと同じ心、うめつらし心悲しと云ふ事なりうらは心なり又うらさびし抔といへるは只さびしき也うらに心なし。卽ちうらきりては心なし心寂しとの意味、心さびしをうらさびしとも云ふ。大島民謠に

うらきりて濱降りて見りば
白波や立てど吾かなや見りやらむ。

おもり＝神歌のこと琉球治下時代に大島に入つたオモロを斯く云ふ。

おつかむ＝頭骸骨のこと。琉球ではのろ神官の位階の名稱。のろくもい、おつかむ、しどわき、しんぐうじ等有り。

おきり＝火のこと。おまつとも云ふ。混効驗集に、みおきれはおまつ共火とも云ふ。和詞にもおきと云ふ。伊勢物語に

おきのゐて身をやくよりも、かなしきは宮古島へのわれなりけり。

古語に、人を思ふ事をおきとあり即ち熱つくなることをおき、大島では火のことをおきと云ふ。

おめちやさ＝思ひ痛く侍りてうたがひ思ふ心。

おめぐう＝尊稱なり。皇子皇女御成人に限らず斯く申也と混効驗集にあり。大島民謠に

今日のよかろ日におめぐうは貰れ受けて

にやから先やお祝ひめされ。

大島では思ひ子のことを斯く云ふ。

がまく＝腰部を云ふ古語なり。大島民謠に、

あやくぶしなてま胸抱かぬよりも

黒たづなてがまく染まな。

かゞすり＝湯取り。（實久の方言）

がはむ＝腰卷のこと。

みこしがはむ＝お腰卷の意味

ひざとりがはむ＝祝女の袴のこと

大島民謠に

黒たづなてがまく染まぬよりも

み腰がはむなて眞肌染まな。

かしき＝赤飯のこと。和詞には、こわめしとも云ふ。強飯と書く、東京

ではおこわと云ふ。混効驗集に、ふすめみおはに重美御飯と書く赤飯の事也かしきとも云ふとあり。

がちやみ＝蚊のこと。大島の手毬歌に、

那覇んがぢやみや人喰らひの强さん云々、

かなし＝愛人のこと。和詞にもあり。十訓抄上に武正といふ舍人のかなしける子の煩ふ事ありて云々。夕顔の卷に、われかなしと思ふむすめを云々。大島民謠に、わつたり談合しゆて、名瀨かちひんぎろやかなし。

かほうごと＝神佛に對する言葉。果報事の漢字を當る。おもろさうし四の卷五十八章あおりやへがふしの前の説明に、首里天尙寧加那志御代萬曆三十五年ひつじの年十月十日つちのとのみのへ、きみてづりのもゝかほうごとの時に大きみの御まへより給申、とあり。大島民謠に

明かす世や暮れて汝きや夜や明ける
かほうせつ(果報節)のあらば又見きよそ

ぎは＝簪のこと。唐音金花又は銀華の訛音語なり。昔は黃金にて作り男子の位官の標識に用ふ。女子用のものよりは稍短く菊花の模樣等を作る。故に大島間切役の髪指を菊型と云ひ、今尙女の髪指をぎはと云ふ。古琉球位簪冠に

國王簪＝黃金向龍形　冠八卷黃地金入五色浮織
王子簪＝金製花覆盆形冠赤地金入五色浮織
三司官以下政務官下は士族平民に至る迄身分の上下に依り、金銀

又は竹木の簪を髪指とせり。

さたなさ＝きたなき事。和詞にも云ふ。伊勢物語詞書に、

さる歌のきたなげさはと有り。

きゆらさ＝美しきこと。和詞に通ず。徒然草に、

萬に、きよらを盡しても又は手足などのきよらに肥あふらつきた

らんと有り。大島民謠に

阿木名辻登てコケラの下見れば

きよらか女童の布織りゆり。

きかすな＝聞かせるなとの意味。夕顔の卷に、

少將の命婦などにきかすなと有り。

きじやり＝段々のこと。源氏帚木の卷に、しなさだまりたる中にもき

ざみ〳〵ありて註次第々々の心也と云々。

きも＝心の意。肝の字を書く。混効驗集に

きもいちやさを肝いたき也腸の心也と有り。大島民謠に

よそへらいすれば肝どかなしもの

しんじつつくち浮世わたれ。

くぶすい＝胸に當る肌着のこと。大島民謠に、

あやくぶすいなてま胸抱かぬよりも

黒手綱なてま肌染まな。

くゝもる＝花の蕾める樣を云ふ。大島民謠に、

九重のうちにくゝもとる花や

客にうち向て笑て咲きゆり。

くが＝卵のこと、八重山の鶯ゆんた節に、

八重枝の巣から

五ひらの卵なし

七びらのくがなし

八重山諸島でも卵をくゝがと云ふ。大島の手毬歌に、

まど鳥の鳴かば
羽ぬぢ飛ばそ
くがぬぢ飛ばそ。

まど鳥は、時を間違へて鳴く馬鹿鳥を云ふ。

くがち＝陸地のこと。特に農作場を云ふ。

くばや＝蒲葵屋「神事を行ふ小屋」。古語なり。大島民謠に、

芦花部一番な御殿地のばあかな
くばや一番な實夕のくばや。

くな＝組のこと。一組二組などを、ちよくなたくなと云ふ。王府御双紙に、神人類を神こなのあむしられた、と有り。

げす＝身分低き人を云ふ。琉球人名考に、

琉球では古代に於ては、況く貴賤の二級を代表的に擧げる時には、按司と下司とし、之を漢譯しては、官員及び人とする事がわかる。按司とは支配者の意味であつて、國王始め王子按司すべて廣義に於ての按司である。つまり治者と被治者で朝野・臣庶の別となる。崇元寺下馬碑の尙清王時代の位階

一、あんじ
二、げす

大島にては島民全部が被治者なるが故に、げすと云ふ。

こもり＝窪地のこと。加計呂麻島諸鈍に南ごもり原と云ふ古戰跡あり。大島民謠に

こもり深ごもり渡らゝぬこもり
情け橋かけて渡ちたぼれ。

こまさ＝細きこと、心の小さきにも通ず。混効驗集に、

すさへ大さとかかちとたるこまさ大君にまはへこうてはりやに

さへむ＝それさへとの意味。琉歌に、

木草さへむ風のあせはおそめきよれ
おなさけにふやぬ人はないさめ

さぐり＝夜ばいのこと。吳竹集七卷に、

うつ人を思ひし妹を夢に見て
起きて探るになきぞかなしき。

じやう＝門のこと。門口をじやうぐちと云ふ。おもろ言葉に、おじよう(御門)あやじよう(綾門)等あり。八月踊の歌に、

大和濱の島や七門口開けて
何事のあてもことやかゝぬ。

237963

しやなめ＝牛の事。古語なり。大島おもりに、

けふちやんほこらしや
なまちやんやをれしや
うまだくれろやうなんぢやら
うりんばゝいけのあじ
しやなめくれるや、云々。

しま＝島のこと。大島では自分の郷地をしまと云ふ。舊記錄に、古琉球の行政官として村を治むるを脇地頭と云ふ。即ち一村の領主にして村を采邑となす、采邑は一に島持とも云ふと有り、しまとは住む處とも解さる。

しのぐ＝凌の字也。風波霜雪暑等の上にあるべし(混効驗集)大島民謠に、凌ぎ取りてにや親や生ちおかぬ

うぬ凌ぎ取りゆす汝きもさらめ。

しゆいん＝書院のこと。混効驗集に御書院がま、南風の御殿番所等あり。大島では奥座敷を斯く云ふ。

しやまじき＝下間敷と書く。行儀よく坐ること。

しわ＝心配の意。世話の訛音語。大島民謠に、

しわぢや〳〵糸くりやしわぢや
糸の切りりば結びやなりゆり
縁の切りてからや結びやならむ。

四十九日＝大島古來の佛事、中陰の法事を云ふ。人の死後四十九日間を中陰又は中陰有と云ふ。生物が死後未だ靈生を得ず、死と生との中間にぶら〳〵迷ひゐて早く生所へ至らんとする。四十九日には必ず生所に至ると云ふ其中陰の間に、死者の冥福を祈り極樂浄土に生れさせるために遺族が特に念佛を唱へる、此の祭を大島では四十九日と云ふ。

しらげ＝白毛のこと。混効驗集に白毛反詞きよけ、清毛老人の白髪を云ふ。

じよしき＝炊事のこと。又妻のことを斯く云ふ。炊事係の意味なり。

すぢや＝すざとも云ひ、長上を斯く云ふ。支那語のスーチェ(秀才)が琉球には入り久米村のスンヂヤとなり、スンジアーが、大島には入つてすぢやとなる。

だる＝樽の漢字を書く。古くは女の敬稱なり。大島傳說、渡連祝女眞南樽、久高島傳說白樽、於戸兼樽、思樽等あり。大島民謠に

あがんませ登て節子向て見りば
節子は見りどもうまだるは見りやらむ。

だつちよ＝古語なり。墓地を云ふ。鎭西村渡連に琉將磨文仁の愛妾祝女眞南樽の墓あり、村の人此の墓地をうふだつちよと云ふ。うふは大のこと。

たぼれ＝給はれ(たもれ)の訛音語。琉球ではだぼりと云ふ。大島民謠に、もの知らぬ童ひきつれて來やをたむ
もの言ひよせて使ふてたぼれ。
土佐の民謠に、
一夜なれ〳〵帶買ふてやらうか
帶ぢや名が立つ金たもれ、

たが＝誰がと同意。古今集に、
花よりも香こそあはれとおもゆれ
たが袖ふれしやどの梅ぞも

玉久金＝男のこと。うめさとしよしられ、とも云ふ。琉歌に、やみの夜の間やわんとめてをがま
玉久金里や月夜にいもうれ。

ちよみす＝美衣のこと。古語なり。

ちゆか＝茶壺の漢字を當てる。支那ではチユーカと發音する。

てだ＝太陽のこと。てだくめがなしとも云ふ。大島民謠に、
月に願ふててだにものしられ
親二人がなし百才願ふ。
おもろおさうし十の卷ありきゑのおもろに、
むかしはじまりや
てだこ大ぬしや
美らや照りよわれ

せのみ始まりに
てだいちろくが
日はちろくが、云々。

琉球でも太陽をてだと云ふ。

とうとうかなし＝神佛を崇め尊む詞なり。和詞にあなたふととあり。

三知抄に、安尊あなたうととと書きあり、あら貴の心也。

どれ＝遊女のこと。言葉の泉に、どれ合ひを野合と註す。琉球では尾類と書きづりと讀む。大島では尾類をどれと云ふ。

とじ＝女房のこと。源氏物語蓬生の卷に、とじごは今も内侍所など。

又攝家のするにつかふ女を刀自と云ふ。和詞では女の惣名。

とよむ＝知れ亙ること。大島民謠に、

諸鈍長濱や大和かちとゆも

諸鈍女童や大島とゆも。

なばんがさ＝梅毒のこと。大島のなばんがさは、琉球治下時代に傳はる。昔琉球が南蠻と貿易し、なばんがさも同時に本國琉球に輸入し大島へも三味線尾類と共に輸入さる。更に室町時代後に内地に傳はり當時内地では、病名を唐瘡又は琉球瘡と云ひ、大島琉球では南蠻瘡卽ちなばんがさと云ふ。

なす＝產むこと。竹取物語に。

おのがなさぬ子なれば、云々。

な＝其方と云ふこと。汝の字を書く、伊勢物語に

ほとゝぎすなか鳴里のあまたあれば、なほうとまれぬおもふもの

から藻鹽草には汝と書てなれと讀むとあり。

なつかしや＝物のなつかしきこと、和詞にも有り。愛褻懷氣（なつかしき）とも書く。

なんじや＝銀のこと。古語なり。御前風の歌に、

槍膳すけてこがね椀ゐして
　なんじや箸取て召しよちたぼれ。

ならし＝なげしの訛音語。長押しと書く。鴨柄の上敷の下に横に渡す林「塵承」

大島民謠に、

名柄カンテメアゴはき玉や
　ならしなん下げておけば
　岩かなやくめが見りゆたんむん。

ねびき＝結婚祝を云ふ。

ねぞ＝かな、うんぞ、おめんぞ、おめおなり、おめぐう、おめぐわ、めわらび、等女の美稱にして、琉球と共通語なり。

里、玉久金、うめ里、うめさとの、きもちやげかな、おめそしら、おめそしらかな、以上を男の美稱とす。

ねぶり＝眠ること。徒然草三十九段に、

念佛の時ねぶりにおかされ行をおこたり、云々。

ねふたさ＝寢たきこと。帚木の卷に

小君はとおしさにねふたくもあらてまひありくなり、云々。

ねたさ＝憤るの心。うらめしといふ程の意味。徒然草百七十五段に

かくからき目にあひたる人ねたく口惜しく思はざらむや。

枕の草子に、

ねたきものこれより遣るも人の言ひたる返しも書きてやりつる後に、文字一つ二つ思ひ直したる、もみの物縫ふに縫ひ果てつと思ひて針を引きぬきたれば、はやう尻を結ばざりけり又かへさまに

縫ひたるもいとねたし。

ねんごろ＝妾のこと。懇の意。

のろくめ＝野呂久目と古書に見ゆ。昔神事を司りし巫女を云ふ。祀る神に二神あり山の神をてるこ神又は幸の神と云ひ、海の神をなるこ神と云ふ。毎年壬の日迎へ四日壬日に送るを島中第一の祭とせり。

はべら立ち＝波立ちのこと。實久の方言なり。

はぎ＝足のこと。和詞にては脛を云ふ。

徒然草百七十五段に、

烏帽子ゆがみ紐はづし脛高くかゝげて、云々。

はえ＝南方を指す。おもろおさうしに、

あはれかなしきみはゑ

くにうちして

すもどりよわめ

右のおもろのきみはゑは君南風、國王を指す。大島にては南風をはゑかせと云ふ。

はづかしけさ＝恥かしさの意、

源氏物語螢の巻に、

右の中將はましてすこししずまりて心はづかしけさ、云々。

はべら＝蝶のこと。大島では人間の魂は死後蝶に變ると云ふ。

ひざ＝下人又は下女を云ふ。薩藩時代に於ける、賣買自由の奴隷のこと。當時の奴隷の價、男一人砂糖千三百斤　女一人砂糖千斤。

ひかされて＝心を惹かれる意。

源氏物語夕顔の巻に

あやしう短かりける御契にひかされて。

ふす＝脆膂のこと。和名保曾、俗に云ふ倍曾。

びる＝童の久しく足立たざるを云ふ。大島では病弱者をも斯く云ふ。

ふぐり＝陰嚢のこと。大島民謠に

やちや坊ふぐりやみちやふぐり、云々。

みちやは土のこと。

まじもの＝毒蛇のこと。琉球では幽靈を斯く云ふ。

まぶり＝魂のこと。

まぶりよせ＝巫女の行ふ降靈術。

まんじよ＝娼婦のこと。琉球の尾類と同じ。

大島民謠に

正月にややれ衣着りやばむ

あもろまんじよ貫らて吳れれ。

うけくままんじよや島中のにくさ

家とじやなされゆめ林の前織しゆ。

まくら名＝艶聞のこと。大島民謠に、

枕名の立つち別れゆる際や

加那やみしゆう暮らし苦るしや。

ましやく＝砂のこと。眞砂の訛音語なり。大島民謠に、

白濱のましやく月ど紛らしゆる

吾肝紛らしゆす加那どやゆる。

まんこひ＝滿戀の漢字を當てる。戀を滿す意。大島民謠に

うんみやだるときゆうきしゆと

まんこひ、しゆん夜や冬の夜も

たなげあらちたぼれ。

みや＝島々の部落に必ず一個所の廣場あり、舊八月十五日に村相撲や八月踊を催す、此の廣場をみやと稱す。混効驗集には庭と註す。

みすか言＝密言。ひそ〳〵話のこと。伊勢物語に、

みそかなる所なれば門よりもえいらてわらはへのふみあけたるつゐひちのくづれよりかよいにけり、云々。

むつれ＝朋友のしたしき仲を云ふ

源氏物語帚木の卷に、

心の中に思ふことをかくあへすなんむつれ聞え給けるとあり。

むつましきことなり。

みな＝貝のこと。徒然草百九十五段に

みなむすびといふは絲を結び重ねたるが蜷といふ貝に似たれば云々。

めわらべ＝女童の字を書く。處女のこと。大島民謠に、

諸鈍女童のつら見りばきゆらさ
布織うち見りばよなたひなた。

もんつくり＝農作のこと。特に蔬菜栽培を云ふ。混効驗集に、耕作の事神農をかみのものつくりと君臣政要故事に見ゆとあり。

むどさ＝愛らしきこと。近松の博多小女郎に、今で思はむぞうれしげに云々とあり。琉球語ではンゾと云ひ、九州邊ではムゾラシイと云ふ。源氏螢の卷に、

人の身の上にてはもどかしきわさや、云々。

もうれ＝海の溺死者や難破船の亡魂を云ふ。亡靈の訛音語なり。

ものいり＝祝宴の場合物をあぶる煮るの意味、卽ち料理のこと。徒然

草百七十五段に、

冬狹き所にて火にてものいりなどして隔てなきどちさし向いて多く飲みたるいとをかし。

まぐあひ＝結婚のこと。古語なり。交接をまくと云ふ。

大島古歌に

今日のよかろ日に女夫まぐあひて
巣ごもりのさかえ鶴のごとくに。

古事記に

伊邪那岐命然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斥能摩具波比爲せ、云々。

やらす＝遣るといふこと。大島民謠に、

線香のねんだな松木の葉ば燈ぼち
山川觀音丸や二番漕ぎ願ふや
はれ遣らせば來い〳〵。

やくめ＝長上に對する敬稱なり。

古琉球行政官親雲上以上の人又は王室神官等高貴の人に對する敬稱。何々役もひのもいがめに訛りやくめとなる。

やまと＝大和の字を書く。內地のこと。

大島では內地へ行くことを大和旅と云ふ。

やわれ＝古語なり。強い意。大島おもりに、

みさき廻らば
みさきどれしゆめれ
やわらうちきやはらば
やわらどれしゆめれ

おもはしのとまりから
やわらうちかゝれ。

よける＝動を除けること。和歌に、

春は花のあしたをよきてにけと有り。

よべ＝夕邊の意味。夕顔の卷に、

よべ御遊にかしこくもとめすらせ給ふ云々。大島民謠に、

よべがで遊だるカンテメあごや
あちやが夜や後生の道み袖振りゆん。

よなべ＝夜仕事を云ふ。近隣の女達五六人集り木綿を引き芭蕉を絲に繋ぐ、村の若者は三人五人集り來て、三味線を彈き歌を謳ひ女達の伽をなす。

よむ＝算へること。古歌に、

わが戀はよむともつきじ荒磯海の
濱の眞砂はよみ盡すとも。

琉歌に

天の群星やよみばよまれゆすが
親の敎へごとはよみやならむ。

よくされる＝汚される又は童貞を犯されるの意味もあり。

大島民謠に、

とのちばあかなや白川水の心
いきやしゆん人によくされたん

城流れの歌に、

城から降りてさん時の間

とかくよくされてなまがでなたむ
よくされやあらむ。云々。

わ又はわん＝吾のこと。萬葉集に、

吾をまつ津ばきふりすなゆめ。註に吾を吾とのみ云ふは古語なりとあり。大島では吾のことをわんと云ふ。

わか水＝元日の朝早く汲む水を云ふ。若返りの水とも云ふ。混効驗集に

日本にては、主水のつかさ此の水を内裏に奉れば、あさかれゐにて是をきくしめす也、年中の邪氣をのぞくと云ふ、本文侍る也、春を得てけふ奉る若水をちとせの影やまでらかふらむ、呉竹集に見ゆ。

をなりの神＝旅行者の守護神なり、琉球はオナイ神といふ。昔首里ではヲミナイウサージといふ房のつける手拭を旅立つ者に持參せしめたりと云ふ。大島にても近年に至るまで旅行者には其姉妹のハンカチフ又は手拭を形見に持たせるを例とす。琉歌に、

うみないがしじまぶるかぬてむぬ
ひちまわちたぼり大和までん。

大島では旅行者の出帆の夜だけ三味線を彈き、歌を謳ひ、旅行者の安全を祈る風あり。

をうこ＝擔棒のこと。兵庫地方でも斯く云ふ。

をふ＝いらへる言葉。應の字を當てる。語尾はあがる。

ほ〻ふ＝承つていらへる言葉。諾の字を當てる。語尾はさがる。

おう＝承諾の言葉、語尾下り語音輕く短し。

ほお＝感心の意を示す。語尾おもむろにあげる。右の音重く長く引く時は極めて敬ひ、輕く引く時は輕く敬ふ言葉なり。

大島人名と附加語

人名は、其民族の時代相や文化と、密接な交渉を有つものである。數百年の間用ゐ來たつた大島獨特の人名は、明治大正に及んで其後を絶たんとしてゐる。

將に消えかゝらんとする古大島人名の組織を明瞭にし、其語原を訊して置くことは、大島民族の過去を知る上に於て、吾々南島研究者の、第一番に著手せなければならぬ仕事である。

大島人名と附加語に就いて、其組織や語原を訊す前に、人名を附するに際し、其根柢となる、民性と民族心理に就いて、其概要を述べてみる。

大島は、文永三年(西暦一二六六)以來凡そ六百年間に亙り、琉球や島津氏に治められた隷屬時代に於て、弱小民族の陷り易い惡弊、卽ち、盲從、模倣、妄信等の民性を造り、其反動として、猜疑、邪推、嫉妬、迷信、呪咀等の民族心理を生み、其結果は、奴隷、亂婚、性格破產等の變態現象となつて、各時代相に現はれてゐる。特に、凡そ三世紀半に亙る薩藩治下時代に於て、前述の民性や民族心理が因となり、祭典儀式、歌謠、戀愛、結婚、慣習等、凡ゆる方面に、大島獨特の史實を釀したのである。

大島民性と民族心理が、各時代相に、如何に影響を及ぼしたかは、更に項を改めて述べることにして、茲には、大島民性が、人名を附するに際し、如何に動いたかを述べてみる。

大島人名の根柢を爲すものは模倣性である。模倣性は隷屬に慣れた弱小民族の特有性である。古來大島の模倣性は各時代に於て、凡ゆる方面に發動してゐる。殊に風俗、習慣、歌謠、人名等に於て、その甚しきをみる。

大島は、明治維新以前數百年の間、大島特有の人名と附加語を用ゐ、人名の組織や、附加語の用ゐ方に依つて、階級の上下、男女の差別等を標榜してゐたが、源爲朝の大島入り永萬元年(西暦一一六五)頃迄は、大島には文字的に組織立てられた人名はなかつたらしい。然らば、何時頃大島に獨特の人名が組織立てられたかと言へば、大島人名の定式から推して、私は爲朝の大島入りに始まると思ふのである。

永萬元年三月、伊豆の大島を拔け出した爲朝は、附近の島々を征伐する時、暴風に吹き流されて、大島加計呂麻島の實久に寄つて、島の娘に子を生ましめたと口碑に殘つてゐる。當時島民が爲朝に非常な尊敬と愛着の心を寄せたことは、加計呂麻島に傳はる口碑や、歌謠を通して知ることが出來る。實久の古い歌に、

大和城の
御曹子や
左ぬ石んきや
へあきぬ
平安子や
石んきや
へあきぬ。
わらべんきや
城の御曹子

いもんな。

と云ふのがある。この歌を通して、其頃島民の心に、御曹子や平安子の名が、非常に強く美しく響いたことがわかる。然して、御曹子の曹子が、大島人名の原型となつたのである。

大島は、爲朝の來島以前に、內地との交通開け、朝廷との親交のあつたことは、日本書紀や古事記等に依つて分る。然して大島には古くから、遠島人や商人の手を經て、漢籍や國文學書が輸入され、島の人達に廣く讀まれてゐた。然して又、禪宗の布敎は天文六年(西暦一五四二)以前に大島本島に及び、天文六年には、德之島井之川村に安住寺を建立して住僧玄信來島し、明和七年(西暦一七七〇)の春住僧白英來島し、其年の冬伊仙村義名山の麓に、安住寺を移したと奄美史談に書いてゐる。天文六年から、明和七年に至る二百三十八年間も、安住寺が同一場所で布敎してゐる處を見ると、當時大島は禪宗が非常に盛んであつたと思はれる。

私から六代前の祖先、法名空悟性禪林居士、文化十年歿の如き、禪宗の僧と同伴下島し、鎌倉時代の壁書(家憲)並びに貞永式目、平家物語の如き、御家流の名筆で書かれた國文學書外和漢の書籍數十冊を藏し、之を後世に殘し、私の南島研究に貴重な參考資料を與へた。斯くの如く大島には、古から漢籍を通して、支那聖哲孔子、孟子、顏子、曹子等の敎へを尊奉してゐたので、之等聖哲の名が、單純な島民の心には眞善美の對象となり、而して模倣性に富む島民は、曩に述べた爲朝御曹子や、支那聖哲孔子、孟子等の名に似せて、喜子、和子、祖子等の人名接尾稱を案出し、喜祖子、貞和子、里祖子式の大島人名の定式を作り出したのである。

而して又、模倣性に富む島民は、琉球入貢文永三年以後に於て、琉球式の童名を取り入れた。

天文六年琉球王尙清が、大島征伐の兵を送つた時に加計呂麻島諸鈍に、

ぐりや(五郎)
あだ(阿陀)

兩名の豪族が居たと口碑に傳へらる。其他に龍郷田畑家系圖に、

思太郎肥　笠利宇宿與人

とある。之等は大島童名の一例に過ぎぬが、童名の外に、間切役や其一族の者が、琉球式の家名や名乘を公稱した例もある。而して之等間切役として、大島に渡來した、琉球士族の一部に過ぎない。諸鈍墓碑に、

久知屋　誰喜美養子親
異國方與人　眞武美
貞享〇〇年

右の碑文の久知屋は屋號、眞武美は童名である。龍郷墓碑に

笠利佐郁
享保三年名瀨本與人

之は地名を姓として名乘つた一例である。

大島は慶長十四年(西暦一六〇九)に島津氏の統轄に移つてから、尙士族に非ざる平民輩に至る迄、琉球士族を眞似て、男子は滿十五歳になると、元服祝をして親の片名を取つて名乘り、一名大人名(せな)を附し、之を公稱した。島津の手に治められて間もなく、慶長十八年に鹿兒島の藩廳から、法元仁左衛門が大島代官に任ぜられて、笠利奉行假屋に赴任した。其後大島代官は、一年交代で下島した。河越將監(元和元年)河上彦右衛門(元和二年)等二字姓の大官や其附役が、下島したので、大島の豪族達は、自分の名乘以外に、內地風の二字姓が欲しくなつて、自分勝手に二字姓

を附した者も居たが、隷屬者として贅澤だと、大官から固く禁じられた。伸びんとした矢先壓縮された大島の模倣性は、型を代へて現はれた。豪族達は年々製出される黒糖を、何十萬斤と上納して、島津の御機嫌を取つたので、島津氏は其禮として、鄕士格と一字姓を與へた。第一番に其恩惠に浴したのが左の二氏である。

隆佐運　享保十一年十一月

龍鄕村浦に田地千四百三石を開き、龍の一字姓を許され、鄕士格に叙せらる。

芝實統　安永七年七月

砂糖四十萬斤を献上して芝の一字姓を許され、鄕士に叙せらる。

右の二氏は、眞實に大島開發に盡したのであるが、後年に至り、之が手本となつて島民は島津氏へ砂糖を上納すれば一字姓と鄕士格が貰へると考へて、盛んに砂糖を献上した。

鹿兒島の藩廳では、島民から献上される黒糖に味をしめて、一字姓を與へる、否黒糖献上の奬勵のために、左の條文を島民に示した。

一、祖先傳來勳功顯著の由緒ある者は代々鄕士、

一、與人にして格別功績ある者は代々鄕士、

一、惣横目にして格別功績ある者は一代鄕士、

一、與人三代相續の者は一代鄕士格、

一、惣横目四代相續の者は一代鄕士格、

一、與人格以上五代相續の者は一代鄕士格、

一、右の外拔群の勳功ある者は特別の詮衡に依り代々鄕士格に叙す

（德之島小史に據る）

右の各條項にある勳功又は功績とは、砂糖上納を意味するので、島の

豪農は、一字姓と郷士格欲しさに、下人、膝(奴隷)を酷使して、製糖に從事させ、製出された砂糖を數十萬斤も上納して、與人や代官の機嫌を取り、間切役に引立てられ、而して一字姓を許されたのである。芝、龍、西、林、東其他、德之島と本島合せて其數五六十名に達し、二世紀半に亙る薩藩の壓政の許にあつて、大島から、藩廳へ献上した砂糖は、數千萬斤に達し、耕地尠なき大島の島民は之等一部豪族の一字姓のために、生涯を小作人として、又奴隷として、酷使され、悲慘なる生活にあつて、血と涙を流しながら、王政復古を心から待ち望んでゐたのである。大島の南部に、明治維新前に、矢張り一字姓を欲しさに、砂糖百五十樽凡そ二萬斤を、上納した者があつた。が間もなく王政復古となり、明治三年九月に四民平等に姓が附けられるやうになつたので、上納二萬斤の砂糖を全部損したと云ふ。斯かる例は維新前後に尠なくない。

斯くの如く大島の人名には、いろ〳〵の史實が秘められてゐるのである。

前述の通り、藩政時代に於て、一字姓を許された者は僅かの豪農に過ぎなかつた。然らば郷士以外の姓なき一般の島民は、如何なる人名を用ゐたかと言へば、前屬琉球の童名を眞似た大島の童名と、內地から這入つて來る、文教や歴代年號から漢字を取り、之をいろ〳〵組合せて、大島特有の人名、卽ち○祖子、○和子、○喜子、○佐應○、佐和○、文仁○、伊能○式の人名が組織されたのである。

次に、大島人名が、各時代に於て、如何なる方法で組立てられたかを述べてみる。

琉球服屬以前の史的人名

鎭西八郎爲朝

御曹子—
林太夫
平安子
大與穗
仙太夫

右は加計呂麻島に傳はる爲朝の口碑に現はれる人名である。

爲朝安與の五字は古代大島の人名に用ゐらる。

小松三位中將資盛
同　少將有盛
左馬頭行盛

右は壽永四年壇之浦に滅び元暦二年三月屋久島、種子島、喜界を經て大島に入る。

盛行有の三字大島人名に用ゐらる

琉球治下時代の史的人名

一、英祖王—第二王系　自文應元年至正平九年

文永三年大島は英祖王に入貢す。

英祖—大成—英慈—玉城—西威

一、蔡度王—第三王系　自正平十年至應永十一年、蔡度—武寧

一、尙思紹王—第四王系　自應永十二年至文明元年、尙思紹—尙巴志—尙忠—尙志達—尙金福—泰久—尙德

一、尙圓王—第五王系　自文明二年至慶長十四年、尙圓—尙宣—尙眞—尙清—尙永—尙寧

右の王名から、志福泰久德の五字大島人名に用ゐらる。

歷代年號より取りし人名

大島の役人は琉球治下時代には、支那年號のついた辭令書を首里政廳から受けてゐたので、日本の年號は慶長十四年に島津氏の手に移つて始めて知るやうになつた。

慶長●—元和●—承應●—明暦—元祿—寶永●—正德●—享保●—寶暦—明和●—天明●—寛政●—文化—弘化—嘉永●—安政●—萬延—文久●—元治●—慶應●—明治●

右の藩政時代の歴代年號から、長●安●應●治●寛●正●貞●元●文●永●德●保●明●和●政●の十五字が大島人名に用ゐらる。

大島人名組織

史的人名又は暦代年號から取つた字を、人名として如何に組合せたかを述べてみる。

一字冠

貞、浦、梅、政、穂、武、直、前、實、隆、

二字接尾

喜子、和子、祖子、孫子、和志、祖志、喜志、義志、裕志、仁志、靜志、壽喜、祥喜、百登、佐登、武美、

其實例

貞和子—天保二年住用間切與人

喜祖子—天保二年東間切與人

浦祥喜—實久村芝存命

實和志—鎭西村生間存命

長文仁—東方鄕士格

眞武美—貞享年間異國方與人

長武美—伊順與人

儀和子—天保十三年東方津口横目
儀和子—笠利村郷士格
里祖子—嘉鐵郷士格
米榮志—東間切津口横目

二字冠

伊能、都與、喜與、喜祖、佐和、佐應、文仁、

一字接尾

國、覇、民、灣、父、恕、民、悅、厚、濱、正、

其實例

伊能國—明和八年東方田地横目
伊能澤—天保十三年東方黍横目格
喜應恕—住用郷士

眞知和—東方郷士
佐和清—文政二年住用與人
喜祖父—文政十三年東方與人
喜祖壽—文化七年住用與人
佐和都—寛政九年西間切横目
文仁濱—享保廿年渡連方與人

一字冠

貞、安、清、富、壽、爲、能、有、

一字接尾

正、俊、淵、岡、直、廣、良、宗、悅、濟、

其實例

萬作—寛政十年東方津口横目

壽父―寶暦八年通常與人格
貞俊―同瀨名方黍横目
幸恕―天保七年東方津口横目
清岡―明和八年東方横目
富宗―文化十四年龍郷方與人
安溫―文化五年東方本横目
右は大島代官記並びに各地方の墓碑系圖等に據る。

女名

南島雜話に、大島の女名は古くは十を算するに足らずとし、眞阿(まかう)、牛水(うし)、太郎(たるか)、加那(かな)、馬(うま)、眞鹽(しゅなべ)、鍋(なべ)、眞阿釜(まかと)の例を擧げてゐるが、之等は、琉球童名であつて附加語と混同してゐる。故に南島雜話の女名の記事は、大島の女名としては正しくない。

私の研究に依る古代大島の女名は左の數種である。

鶴、龜、松、竹、梅、春、菊、鍋、米、坊、鹽、
等であつて、其修飾として、
竹、牛、春、菊、百、千、萬、
右の外に、
加那、吾子、金、等の附加語を用ゐ、
菊加那、爲鶴、菊松、萬鶴、百菊、千菊、萬菊、
など、一字名に、接頭接尾の附加語を用ゐ又は修飾語を附して、いろいろの女名を組織してゐる。

附加語

附加語とは、人名又は固有名詞に附する、接頭接尾の美稱を言ふ。

一、接頭美稱

眞(マ)　御又美(ミ)　御(ウ)

右の三稱を接頭美稱として、人名又は固有名詞に附す。

二、接尾美稱

加那之(カナシ)　加那(カナ)　小(グワ)　金(カネ)　吾子(アゴ)

右は、人名接尾美稱として、主に女名に多く用ゐらる。

三、附加語の階級

イ　美、御、加那之、神又は王の如き至上の名稱に附す。

ロ　主、加那、樽、祝女又は役人の人名に附す。

ハ　金、一般庶民の人名に附す。

大島の人名附加語は右の階級に區別される。

一　接頭美稱の用例

一、眞—尊敬の意を現す。

大島歌謠中の地名

眞名瀬……名瀬

眞住……住用

眞久慈……久慈

眞西……西方

眞東……東方

眞與路……與路島

大島歌謠中の人名

眞鹽……戸圓白眞鹽

人名以外の用例

眞鹽……食鹽
眞胸……胸
眞肌……肌
眞米……米
眞玉……寶玉
眞性……本性
眞しやく……眞砂

二、美又は御（み）―敬ふ意

大島歌謠中の用例

み山、み浦、み袖、み腰がはむ（腰卷のこと）うとみ（人名）うまくら枕）うちやげさぢ（頭布）うさーじ（手拭）

二　接尾美稱の用例

樽　琉球では王族の童名に附す。敬ふ意。まあかとたる―尙眞王の童名。

大島人名中の用例

摩加戸樽　享保三年赤木名祝女
眞人多留　赤尾木禱家系圖
阿人多流　手花部伊家系圖
恩納樽、うま樽―大島歌謠

眞と樽の重用美稱

眞南樽―渡連傳說

三、加那―男女に拘らず用ふ。愛する意。

大島歌用中の用例

上ろ日の春加那（祝女）

大如來の稻加那(祝女)
嘉德鍋加那……(美女)
ばあ加那—(芦花部一番)
岩加那—(カンテメの愛人)
城平加那(油井傳說)

四、加那之—愛する意。和詞である。

源氏夕顏の卷に
われかなしと思ふむすめを云々。

其用例
王公加那之—琉球王を云ふ
首里天加那之—前同意
祝女加那之……祝女

神加那之……神
親加那之……親
お月加那之……月
日くめ加那之…太陽

五、小—愛するの意。接尾美稱である。

枕の草子に
何も〳〵もちいさきものはいとうつくし云々。右の言葉で、小の意味は十分現されてゐる。

其用例
山ぐわ(人名)　船ぐわ(船)　三味線ぐわ(三味線)

六、金—和詞あごかねと同根、接尾美稱である。

大島歌謠中の人名

菊恕金、松金、俊金、おめおなり金

鶴松金、思戸金、摩三郎金

七、主（しゅ）―敬ふ意。接尾美稱である。主に男名に附す。

琉球の世謠（ユウーテー）に

犬の子や犬ど産しゆる。

虎の子や虎どなしゆる。

物食ゆ者と吾がお主（しゅ）

内間御鎖（うちまあざす）のど主やなりみしえーる。

天明元年四月二十三日尙德王薨去の時、首里城に開かれた、王嗣擁立の大會議に、安里大親が歌つた神託（かんだ）、大島では主が、老人の敬稱になつてゐる。

其用例

幸恕主―（まんこひ節）

伊能國主（八月踊の歌）

伊津部俊良主（俊良節）

附加語の重用

琉球では附加語を二重三重に重用して、王妃又は王公の尊稱とした。

眞鍋樽金―尙眞王の寵妃

大島では、大將に非ざる者に大將と云ふやうな場合に、附加語を重用して、

樽金大主、たるがねうふつしゆと云ふのである。

葬

制

奄美大島古代の葬制

五六年前に、私は、カリフォルニヤ以南アメリカ太平洋沿岸から、ヒリツピン諸島へかけて、民族藝術の研究をつゞけてゐた。其頃マニラで土人から、風葬の話を聽いたことがある。

ミンダナオあたりでは、土人の子供が死ぬと、海ばたの椰子の樹の下に死體を運んで、横臥させたまゝ、風雨に曝して、腐れるまでは、其母親は毎日通うて、子供の顔を見て泣くと云ふことである。又印度のコロンボでは死體を鳥に喰はしてゐるとも話してゐた。

大正十二年に、私は奄美大島に歸つて、更に大島全島の、史蹟、土俗、歌謠等の資料調査を着手した。其頃から、私は風葬の土俗が、南太平洋諸島古代の葬儀であると云ふことを考へてゐたので、大島に於ける風葬の遺跡は、細心の注意を拂つて、探査に力めた。幸ひに本島の北部、笠利龍郷兩村一帶の海岸線に、數ヶ所の風葬の遺跡を發見したのである。

奄美大島に於ける風葬の遺跡

一　笠利村大字用にやで(小島)
二　同　村同　字　石原(横穴と岩洞)
三　同　村大字宇宿の海岸(砂丘一帶)
四　同　村大字屋仁の神山
五　同　村大字土濱のイヤン屋(岩屋)
六　同　村大字赤尾木がくまる(洞窟)
七　同　村大字手花部大和城山の頂上
八　字檢村大字字檢枝手久島の海岸

風葬後の納骨洞

一　笠利村大字笠利　はま屋
二　同　村同字　尻田
三　同　村同字　あなどうる
四　同　村大字屋仁　やんにやじ
五　同　村大字笠利　とびる
六　同　村大字　大濱

右の外に二三ヶ所、風葬の遺跡があると聽いてゐたが、實地調査の機會を失つて、茲に紹介することの出來ないことを殘念に思ふ。

奄美大島の先住民はアイヌであると云はれてゐる。アイヌの全盛時代に、九州本土から大島に渡り更に、琉球まで南下したことは、考古學者や人類學者の、等しく認める處である。私は、大正十五年の秋、龍郷村でアイヌ式の石斧一個土器三點を發見した。

一　石斧一個龍郷村大字龍郷中江實熊氏の宅地井戸工事中發見さる

二　土器一個龍郷村大字龍郷保志堅の古墳附近から發掘さる

三　龍郷村大字秋名の田地から土器二個發掘さる

琉球ではアイヌ式の土器二十八點が發掘されて、アイヌの全盛時代に、大島を經て琉球迄南下したことが、考古學者に認められてきた。

アイヌの次に、大和民族の一部隊が、大島に移住して、アイヌの血と複合して、複合人種をつくつたことは、大島の神話や、又大島のおもりで謳はれてゐる、獨木舟がたなきよらと云はれ、そのたなきよらが古代大和民族の使用した棚有舟、卽ち縫舟時代の刳舟であることや、大島語の內に、古事記や萬葉あたりの古文學書に現れてゐる、古代和詞が多く含まれてゐることからして、大島に古くから、アイヌや、大和民族が住んでゐたことは、明らかなる實である。

之等古代の島民は、笠利龍郷一帶の平原に居を構へ石器や土器を使用して、山と海に食物を採り、平和に暮らしてゐた。この時代を私は食物採取時代であり、又風葬時代とする。

笠利村大字平土濱に、大島の靈地として、現世と後世との通路と云はれてゐる鐘乳洞がある。俗に土濱のイヤン屋(岩屋の意味)と云ひ、古代葬制に關する幾多の怪異な傳說を秘めてゐる處である。私は、去年の九月、笠利村役場から案內者として、同道した書記日高百七氏や、笠利青年訓練所主事坂元政盛氏の案內で其岩屋を調査して、其附近から、古代

の貝殼を發掘した。之に依つて、第二期風葬時代即ち食物生產時代(太陽崇拜)以前に、其岩屋に人が穴居してゐたことがわかつた。

古代大島の人は石斧の外に刃物は使つてゐなかつた。壽永四年壇之浦で敗滅したと傳へらるゝ平家の殘黨資盛、行盛、有盛等の一族一黨の者の大島落を書いた古書平家落人軍物語記に、

島主無之島にて、浦々入口〳〵に人家有之候得其山蔭に人家有之候何とて人家不作哉と問尋ねければ、海上より、盜人來りて家財强盜仕候に付山蔭に家を作居申候。先武具無之處にて、入口浦々別に分れたり、主有之樣に相見え候鐵の刃物無故木を以て斧の樣に柄を入れ、其木先に少しの鐵を入れて仕樣子に相見候。其先を人に不爲見樣に格護仕事に候。

之に依つてみれば、大島には刃物は、餘程後になつて、輸入されたと考へられる。然う云ふ時代、特に石器を使用してゐた古代にあつては、死人があつても、死體を納める棺桶を作ることを知らず、死體を覆ふものさへ無かつたので、仕方なく居所を離れた、海岸に死體を運んで、風雨に曝した。卽ち風葬を行つたものであると私は考へる。ヒリッピンで行はれてゐる風葬は、其肉身の者は毎夜通うて、死人に逢ふとのことである。大島でも風葬時代には死人の處へ通つたらしい。今日尙埋葬の墓前に死後一週間は、燈明や線香や花を持つて通ふのである。

大島に於ける最初の風葬場は、笠利村宇宿の海岸である。砂丘一帶に亙つて、いつでも人骨が出る。横臥其まゝのも出るのである。其枕元に、土器が置かれてある場合もある。

明治初年に、隣接の土盛と云ふ部落の畑地から石斧が七個發掘されてある。それは宇宿の風葬時代のものであつて、其間には密接な交渉